

——若しも貴女を失つたら、……命よりも大切にしてゐる貴女を！……私は死なう。お、ライ  
ス、私は今言つたさういふ譯で私の手を受けて下さいと急ぎ、又、コリントスを發つてアムバラキ  
アに行つて下さいと頼むのです。——

ライスはその手に、愛人の手を固く握り締めながら言ふ。

——ま、何といふ崇高い御心。……お、レオンチデース、親切なその御心に、如何して妾は感謝  
し盡したら好いことやら。……

——あゝ這の幸福!! ライス、貴女は、私の戀を受け入れて呉れた!!……

と共處へ、給仕の乙女が這入つて来て、次の詞で熱し切つた此對話を中絶するのであつた。

——上司の方が、大變重大な事件に就きましてレオンチデースの殿様に御話しが爲度いと被仰つ  
てと御座います。——

レオンチデースは不満げに呟いた。

——間のわるい時に、……何の用だといふのだらう、……ライスがお許し下さるのなら、此方に  
に御案内申上げて、——

——あの、……レオンチデースの殿様に御話しが爲度いのださうで御座います。御用は、重大なこ  
とで御座いまして、……全く秘密を要するからと被仰いました。

——ではレオンチデース、一寸行つて御出でなさい。……妾は此處で、貴方をお待ち致して居り  
ます。——

とライスが言ふ。

レオンチデースは不承不精に尾いて行く。彼女一人になつたと思ふと、其折を待ち受けて居たも  
のゝやう其處に姿を現したのは先刻の變な客、ドレアスといふ男であつた。つか／＼と彼はライ  
スに近づくと、如何にも馴々しい調子で話しかける。

——ほう美しいライスさま、私だつてもつと重要な事件に就いて貴女とお話が爲度いのですぜ。

……重大も重大、貴女の幸福、いやもうお命にも關する事ですからな。——

——何ですか氣がゝりで御座いますこと。——

——や、是は言ひ過ぎ、……御安心下さい、私を此處に遣はされた御方は、本心の所は貴女の幸  
福より他望んでいらつしやりはしないのですから。——

——何方が貴方をお遣はしになりましたので御座いますの？——

——貴女に焦れ、貴女を……搦つ攫はうとまで試みられた或有力な御方の……私は密使、……解りましたか。——

——えつ！ 彼の不屈者？！——

——左様。……貴女を手に入れる爲には、希臘全體をも犠牲にし兼ねない方です。さ、御覽下さい。其御方から貴女に宛てた這の御書面、先づ御読みを。すうとお眼を通されて、貴女御自身、其御方様の愛と勢力とを御察し……御判断を願ひませうか。——

ライスは、ドレアスの渡した手紙を読む。

——不慮の事情より計畫齟齬を來し、其方は二度迄も我が手を脱れ候得共、ゼウスの神に誓而申す、死してか生きてか、其方は當然我手に落つべきものに候。吾は神以上にして、凡てのもの我意志に従ふ。我戀を焦立たせ候事は愚の骨頂にして、吾に反抗せんか爲如何なる手段を講じ候共結局無益に候得者、吾に對し速に戀之誓可被成候。ライスよ、其方の美斯く迄吾を熱せしめたるものなれば其方の力にて元の清涼を辨償可被成、其方の眼が我心に點火せる烈しき火焰を消止め吾に愛を割く事は其方の不可不負義務に候。然時其方は雅典コリントス否全世界に於ける最も富み且譽ある

者たらん。我信頼せる密使は其方の返答を獲んと待受くる者也。須く再考三考せよ。諸者即助命與幸福にして……拒絶者其方の一死有る而已……

此手紙を読んだライスは憤然として言ふのであつた。

——耻知らず!! 殺すなどいふ嚇し文句で戀を得やうとは、何といふ卑劣な……

——いや何、それは、何とかして貴方が承諾されるやうに畢竟忠告を與へる譯合ひになるのですよ。……拒絶なされば貴女は亡い者、貴女は私の御主人を能く御承知だ。——

——差し出た口をお利きでない!——

——貴女の御命に係はる事ですからな。……私の主人は一寸やそつとちや有りませんぜ。ワシレアスの命じた時には従はなければなりませんよ……

——不所存者! お退りなさい!……

——おや、……では、……拒絶しやうとなさるので、……

——お退り! 聲を立てますぞ——

密使は退きながら、

——貴女は左う爲度いのですか。へッ、嚙、御満足でせう。……が、……今に……御覽……

なさい、よ……

ドレアスは去つた。

ライスは、やつとの思ひで女執事のバクキスを呼ぼうとして、聲も得立てず身を顛はしてゐるのであつた。

レオンチデースとバクキスは何事かと急いで同時にやつて來、這の有様を見て、レオンチデースが先づ駆け寄つて彼女を抱き起しながら叫んで言つた。

—— 仕うしたのです。……一寸居ない間に何事が此處に起つたのです。——

(ライス)

—— おゝ、怖ろしい事!!……脅威し、……命を取ると、……

(レオンチデース)

—— さ、お話し下さい。——

—— え。……貴方は……氣を付けてゐらしたやうでしたが、……あの怪しい客が、怖ろしい事を申しました。——

—— で?——

—— 彼の男は、妾を亡い者にしやうとする、恐ろしい、不思議な敵の使者なのです。——

—— 不屈者!……矢つ張り左うか。私も、仕うも變な奴だとは思つて居ました。……ちえつ!……見つけたら最後締め殺してやるのに!……して、何と貴女に言つたのです。—— 今宵の内にも妾は持物をすつかり剃ぎ取られ、……牢屋に繋がれねばなりません。——

—— 其辱屈が!!……ライス、御心配なさいませぬ。レオンチデースは、何時でも貴女を護つて居ます。……黄泉の妖女スツクスに誓言以て、彼奴の首を取るか、私が取られるか。……バクキス其方は、其ドレアスといふ者が何處に行つたか存じてをるか。——

(バクキス)

—— はい、殿様、……私は其奴が急ぎ足で花園から出て行くのを見ました。……さうして、何でも海の方へ参つたやうでございます。——

(レオンチデース)

—— ライス! 貴女の立場からも能く判断して見て下さい。今も今とて私に話し度いと頼んだ變な奴、……この男も必定敵の廻し者に相違無いが、……そら、この巻物を私に渡して斯う言ふのだ。「此紙にはライスの運命が書いてある。若し彼女が、目下或人から受けてゐる申出でを承諾したら、

貴方は此巻物を焼き捨てよ。……だが萬一、彼女が其の要求を拒絶したら、其時之を開いて見ろ！」  
……ライス、這の要求は一體何であらう。——

(ライス)

——同じ事です……同じ男の爲る事です。——

(レオンチデース)

——けどもの！ 何だとして這麼企劃を爲るのだらう。……ライス！ 貴女は完全に私のものです。今日程貴女が庇護者を要する事はありません。……私の命は、そつくり貴女に捧げてゐます。……ゼウスに誓つて!! 私が貴女を助けるか、得ないか……今日一日に懸つて居る!——

ライスの最も親しい人達は、執事バクキスから這の狼藉のことを知らされて、今宵の宴の興を亂した其不愉快な出来事の顛末を聞かうと此處に集つて來るのであつた。誰も彼もライスの周圍に押し寄つて、各自、自分等の感情や誠實な心の程を改めて披瀝する。

ライスが言ふ。

——吾が良き友の方々、……大變な事が起りましたが、何卒お聴き下さい。今妾には、貴方がたの忠告も支持も非常に必要な折なのです。今宵の宴は平常のやうに愉快に楽しく始まりましたが、併

し妾には、其終りが大變悲しい事に成るのではないかと胸騒ぎがしてなりません。——

——偉なる神々様!……一體何が起つたのです。——

と、異口同音に友の人々が叫んで訊いた。

(ライス)

——妾は貴方がたに事の始末を申上げやうと思ひますが、先づ這の巻物から始めませう。……レオンチデース、夫を妾に委せて下さい。——

(レオンチデース)

——私が開けなければならぬのです。——

(ライス)

——妾に下さい。是非!……貴方は中に書いてある事を匿さうとなさる?……さ、アリスチツボス、聲高に読み上げて下さい。——

彼女は巻物を彼に渡す。

アリスチツボスは讀む

——貴族レオンチデースの親戚にして、コリントスの殖民地アムバラキアに總督の職を奉ずる同

性レオンチデースを名乗る者に對し、オリムピアス曆九十九回の第一年初頭、ヘカトンベオン月の第三日コリントスに於て左の如く決定せり。

アムバラキア總督レオンチデースは、本來同性貴族の財産にして一旦一外國女性の手に渡りしもの、當然の繼承者たる事を宣す。即、故レオンチデースの遺言は破棄せられ、將軍レオンチデースは今日より該權利を保有すべし。

斯う讀み上げられた時、其處に集つた人達は、一體何の事やら、孰れも全で狐に撮まれたやうな氣持であつた。唯一人、其意味の解つたライスは微笑みながら。

——若しそれが元老院から來た決定ならば妾は尊敬もし、従ひもします。……匿れた敵の企謀でしたら妾が負けるどころですか、笑つて終ふだけの事です。——

——全くです。私共は、ライスの冷靜と道徳的な態度とを稱讚し度い。——

(ライス)

——で若し這の命令に従ふ事に成りますと、今宵から花園は妾のものでは無くなる譯で御座いますけれど、併し貴方がたは尠しも御遠慮には及びません。レオンチデースが妾に代つただけで、畢竟同じ……さうではありませんか？ レオンチデース。——

(レオンチデース)

——貴女を追求する敵は、彼の凡て無名氏の稱に匿れて無責任な事をする奴と同様、實に唾棄すべき奴、呆れた奴です。……おゝ、若し元老院が、私同様、這の暗い復讐の原因を知つて居て呉れたならば、よもや這麼馬鹿々々しい……えゝ！ 穢らはしい贈物を這の私を受取る筈がない位はわかりそうなものだ！——

と彼は其巻物を引裂き、足に踏み躪つて斯う附け加へて言ふのであつた。

——今に見よ、私は、穢らはしい其奴を此やうに踏み躪つて呉れるであらう。……あのドレアスとかいふ奴などは敵の木つ葉野郎にしか過ぎないのです。——

(ライス)

——おゝ、崇高い其御心！——

(クリンデース)

——おゝ、おゝ、富の神ブルーツスに誓つて。レオンチデース將軍、……貴下のやうに、與へられた富を眼中に置かないといふのは、それは不可い。……寛大も度を越えるのは、……大方夫は戀に夢中になつてゐるからですな。

が、ライスの友達は孰れもレオンチデースと握手し、その立派な行ひを敬するのであつた。

(アリスチツボス)

——將軍、貴方の見上げた行ひは確かに凱旋以上の價値があります。……且その遣り方は如何にも貴族らしい、高貴な血を享けてゐると思はせるに充分です。明日にもコリントスの市は、票決して貴方に榮冠を贈ることせう。——

聽て、這の不吉な事件のことは凡ての客の耳にも這入つた。で、ライスは這の物好きな人達に取り圍まれてゐると、突如として一人の士官が一隊の兵士を引率して立現はれる。

士官が言つた。

——小官は元老院の名に依つてライスを逮捕致します。——

人々の顔には驚愕の色があらはれた。ライスは、本能的にレオンチデースの腕へと身を支へて、

——おゝ、案の定……ドレアスの迫害が實現されました。——

レオンチデースは士官の方に進み寄つて嚴然と言ひ放つた。

——元老院と雖も個人の住宅を侵害する権利は有りません。私共はライスを渡すことを拒絶します。——

(士官)

——私は、義務を果すばかりであります。——

(レオンチデース)

——誰が君を派遣したのか。——

——元老院長であります。——

——何故逮捕するのだ。——

——私は存じません。私は與へられた命令を實行するばかりです。

(レオンチデース)

——その命令こそ甚い事だよ。……コリントスの首班者として私は自ら元老院に、是が抑々惡徳者の奸計だといふ、事の真相を引剥いてくれやう。——

——閣下の御行動は閣下の御自由であります。小官には唯、與へられた命令を果す責任があるばかりです。——

(ライス)

——友の人達、法の命する所に反抗するのは罪惡です。……妾は掟に従ひませう。——

と彼女は、士官の前に進み寄ると、  
——さ、どうぞ、御命令通りに。——

## 第十章

### 入牢——裁判

呪はしい其夜は明けた。獄屋の重い扉の裡に幽閉の憂きを託つ身となつたライスは蒼白い手に額を支へて、定め無い人の世の過去行末をつくぐと思ひめぐらして居るのであつた。

——ライス、ライス、なんといふまあ變り果てた姿であらう……たつた一日、……つい昨日までも妻は自分に憧れ寄つて来る夥しい澤山な友達の群に圍まれて、唯もう甘い匂ひと愛とに浸り酔ひ、贅澤の限りを盡して居たつに！……今日は唯獨り、……誰あれも誰あれも居ない。あのやうに妾を愛して呉れた人達も、多分最うライスを忘れて居るのであらう……。忘れられて自分は暗い々々牢屋の中で散り失せるのか。はかない運命だ！

だけど仕うして妾は？……。コリントスの市には友達よりほかにはもたない筈なのに。何處から妾を這麼に突き落した者は來たのかしら。あ、然うだ。……レオンチデースの被仰つた事に間違ひ無い。此やうに酷たらしく妾を苛むことの出来る者は、彼の祭司よりほかにはない筈だ……妾は、彼の忠告を輕蔑してゐた。デアゴラス、ソークラテース、アルキピアデスの先例は、何故妾の眼を

開けて呉れなかつたのだらう。が、噫最う遅い。是から將來妾は如何爲やう……？ 妾の美、妾の富に蟻のやうに集り寄つた多勢の人達、……あの内一人も、本當に妾を助けて呉れる人が無いのであらうか。……おゝ、レオンチデース！ 貴方の妾に打開けられた熱い御心が、今斯うして妾の頭上に落ちかゝる恐ろしい嵐に冷えて終ひは致しませぬか。……

と、這の詞が終るか終らない時、獄屋の扉がギューと開いて、飛鳥のやうに駆け込んだレオンチデースが、轟と彼女の腕に抱きつくのであつた。

——ライス!! ——

——レオンチデース!! ——

と同時に叫んだ。……彼等の唇は、初めて長く押しつけられた。

——さ、さ、ライス、一つ時も躊躇しては成らぬ。夙く!!……脱出れる準備は出来てゐる。急いで這の絶望の場所を振り捨てなければ……。一時間の後には、私達は恩知らずのコリントスの市には居ないのだ! ——

——お許し下さい……レオンチデース。誠實な貴方の愛は、能く、能く妾には解りました。……併し、……。愛すればこそ被仰つて下さる貴方のお心に背くやうでは御座いますけれど、復たもや妾

はお詞を反へさねばなりません。……ソークラテースの最後のお詞が、未だ妾の心に生きてゐます……今此處で逃げ奔るのは、自分の罪を認めることになるのですもの……妾は身の潔白を青天白日の下に宣言し度いと思ふので御座います。——

——うゝ。……不幸な女だなあ……ライス! それは好んで「死」に急ぐといふものです……。

——遁げて疑をコリントス人の心の中に残すよりは、寧ろ妾は、鴆毒を仰いで死ぬ方がましと思はれます。——

——だが貴女は、斯ういふ残酷な事に貴女を運んだのは一體誰の仕事か御存じですか? ——

——否え。——

——夫は、……エレウシスの祭司ヴシレアスなのでぞ! ——

——妾も、多分さうで無いかとは思ひました。——

——それだから!!……御存じの通り彼の男は、復讐となれば什麼事だつて辭せない男です。……惡まれたが最後、何處迄如何されるか解らんですよ。さ、ライス、さあ……噫、是程言ふのにまだ貴女は躊躇なさるのですか。——

——妾はソークラテースに倣ひ度いのです。——



——ライス！……私を愛する心が有つたら、……どうか其愛の名に依つて、こゝは私に譲歩つて下さい。——

(牢番の聲)

——將軍、……時間が参りました。……最早少し過ぎて居ります。——

——あれを御聞き、ライス。……さ、通げるのです！ 早く！ 早く！——  
と彼は彼女の手を取つて引き出さうとする。

(ライス)

——レオンチデース。……貴方から愛していたゞく妾は、愛されるだけの値打ある女に成り度う御座います。……牢破りは不徳、踏み止まるのは崇高い愛に對する義務なのです。——

稍長い沈黙がつゞく。眠つと考へ込んだレオンチデースは泪の滲んだ眼を上げて彼女の手をとる。

——おゝ!! 見上げた心！……ライス。私は最久留めやうとは爲まい!!……それにしても神々は此やうな立派な心の女と、是をしも處罰しやうと試みる大罪人とを一つ所に扱はうとするのだらうか……

——妾は、貴方を妾の辯護の人に選び度いと存じて居ります。——

——被仰る迄もありません。……欣んでお受け致します。だが唯、……若し私が貴女をお救ひ出来なかつたら、貴女と共に死ぬといふ條件をつけさせて下さい。——

牢獄の扉が再び開いて、番卒がレオンチデースを呼びに来る。續いて士官が這入つて来て、最早裁判の時間だとライスの出頭を促し立てる。

ライスは、頭部からだらりと長く、足先迄垂れる白い被衣に身を包むと、レオンチデースの腕に倚つて獄屋を出た。其處の門脇には、バクキスに連れられた彼女の侍女や奴隸達や、アリスチツボス、スコパス、ミロン、其ほか澤山の彼女の友達が待つてゐて、裁判の行はれる廣場の方へと従ひ行く。コリントスの市民等は廣場一杯に押集り、一段高い處には、元老院議員が彼女の着くのを待ち草疲れてゐるのである。

聽てライスは、白い姿で静々と高座の直下迄歩み寄ると、警護の士官は、被告の辯護人として認められたレオンチデース一人を彼女の側に残して、彼女に扈從して来た多くの人々を退かしめ、こゝに被告と辯護人とは稍廣く二列の兵士等の圓陣に取圍んだ空地の中央に孤立し、其正面には是も同様兵士等に取巻かれた原告と證人とが陣取つてゐるのであつた。

傳令使が来て、人民は裁判中靜肅にすべしと命令を下すと、裁判長は徐ろに口を開く。

——被告ライス、其方は、神々に對して不敬であり、人々に向つては惡事を立働いた狀情に依つて訴へられた。法律は此二ヶ條の犯罪を處罰する爲、被告を死刑に處するものである。……が、法律は萬一被告に異議がある場合、一時間だけ辯護の時間を與へてゐる。存分に申立て、好いであらう。其方は辯護人を選定したか。——

レオンチデースは片手を高く差上げる。

——私!! アムバラキアのレオンチデース。……して、原告は何處にゐるのです。——

——此處に在る。此方はドレアス。……エレウシスの祭司ヴシレアス様の代理人として出廷したので。——

——ドレアス? うゝん、さてはライスの夜會の彼の反逆者!!……判官諸公、この男が爲たものとすれば、此告訴は決して眞面目なものではありません。——

(ドレアス)

——否此事件は、被告の辯護人、そなたが考へるよりは遙かに重大なものですぞ。告訴者は僧正ヴシレアスだ。……エレウシスの祭司ヴシレアスだ。此方は、密教徒の推戴する大祭司の代理人として派遣されてゐるものですぞ。……證人は孰れも被告から酷い目に遭はされた人々で、遲疑無く

其事實を誓言することが出来るのですぞ。——

(レオンチデース)

——ドレアス、反逆者!。……且、汝の主人といふのは惡黨だ今に假面を剥ぎ取つて見せやう。

……。ライスを亡き者に爲やうとヴシレアスが用ひた殘忍な手段は密告者に依つて悉く明かなのだ。——

(ドレアス)

——レオンチデース、其方は、權力者を侮辱するののか。……ちと氣を附けたが好からうぜ。——

(レオンチデース)

——黙れ! 虚偽と暗黒の塊り!! 事實を洗へば原告こそ罰せらるべき者なのだ。……——

市民から選任された尊敬すべき吾が法官諸公! 貴官等は何方も能くライスを御承知の筈です。彼女は、コリントスが其市の矜持の中に數へた美人であります。……併し貴方がたの多分御存じ無いことは彼女の外形の美に勝るとも劣らないこの女性の慈悲善行の數々であります。諸公は、如何に彼女の生涯が日毎々々善根に依つて裏書きされて居るかといふ事は多分御承知ありますまい。希くば民衆の誰彼に御訊ね下さい。……貴族の方々に問うて御覽なさい。總ては彼女の爲に起ちませ

う。何故なら彼女は、孰れの社會にも缺くべからざる者であり、有ゆる人達に愛せられて居るからです。

然らば何のためにライスが諸公の面前に引出されたので御座いませう。彼女が罪を犯したといふ事實を唯の一つでも御見聞なされたことが有りますか。……説明しませう。此奇怪な事件の起りは實に意外な所に在つて、本來敬虔にして節操を嚴守すべき地位に在るエレウシスの祭司の心内に、ライスに對し不倫な愛慾の情焰が燃え立つた事で御座います。そこで無耻厚顔な彼僧正は掲ぐるに絶大な富と名譽とを以てして彼女を誘惑し、恐ろしい死を云々して之を威嚇したのであります。清廉な彼女は斷乎として有る間敷き這の邪曲の戀を倭拒したので御座います。其後の成行きは此處に喋々する迄も御座いませんから宜しく判官諸公の御推察に委かせるとして、要するにライスが斯の如き場合祭司ヴシレアスの背徳に對して有徳な行動を選んだが爲に此處に引出される事になつたといふ前代未聞の奇怪な事實を披瀝すれば足るのであります。――

(ドレアス)

――御注意！ 御注意を判官閣下。……被告の辯護人は、大、大僧正の特異な職責に對して拂はるべき尊敬の念を忘れて居ります。私は、……ドレアスは、ヴシレアス祭司の代理人は、レオンチ

デースもライスと共に被告として糺彈せられん事を判官閣下に要求します。――

此時邊かに、非常な喧騒が民衆の間から涌き起つた。棒を携へた一人の男が、番卒の列を掻き分けんとしては推し返されつゝ、彼の回陣を造つて警衛に當る人垣を亂し、無理やり其れを横切つてライスと其辯護人の居る場所迄突き進まうと盛に反抗しながら大聲を揚げて叫んでゐるのである。

――通せ！ 通せ！！ 余輩は正義を明かにするために來た者だ。……諸君は、這の服装で余輩の自由市民であることが解らないか！！……鐵と鍛へた此體軀を見ろ！ コリントスや雅典の犬共には解らんだらうが余輩こそはチオゲーネスだぞ！！――

兵士等は懸命に彼を遠けやうとしてゐるが、何としても聞かばこそ。

――通せといふに！……解らん奴等だ！ 俺が是程繰り返へして言つて居るではないか。……コリントスの正義を照す爲め雅典から急いで駆けつけたんだぞ！――

(裁判長)

――其男は何だ。――

(チオゲーネス)

――自由市民！！……余輩は、判事諸公に誤れる裁判を爲さしめないため、悪人の讒誣からライス

を辯護する義務を持つてゐる。――

(裁判長)

――さう言ふ其方は誰だ。――

(デオゲーネス)

――一度失はれたら再び求めることの出来ない男だ。――

――其方の姓名を訊ねてゐるのだ!――

――デオゲーネス――

と大きな聲で彼は叫ぶ。

――余輩は終始立派な男を求めてゐるが、輕薄な當代では中々それが搜し當らず、反つて勝れた一人の女性ライスを求め得たのである。……然ういふ譯合のライスだ。余輩はコリントスの市民として彼女の爲に一言しなければならぬのだ。――

(ドレアス)

――判官! 這の男は乞食です。……馬鹿です。――

(デオゲーネス)

――俺は自由市民だ! 貴様は下郎さ。少し旨い物を食つて居る只の奴隷だ。引つ込め、引つ込め!――

(ドレアス)

――無禮者!!――

(デオゲーネス)

――コリントスの市民として余輩は余輩の權利を主張するのだ。――

(ドレアス)

――市民の權利は其方には無い。其方は住宅を持たんぢやないか。――

――何だと! 住宅を持たない?……は、あ、なんだな? 一昨日スキチャからでも出て來た奴か。……判事、余輩は決して嘘を吐かない。余輩は二戸の家屋の所有者である事を明言する。其一は雅典に在つて學士院から與へられたものであり、もう一戸は、ライスが其友デオゲーネスの爲に工匠に命じて造らせたもので、コリントスのクラニオンに在る。――

(ドレアス)

――そなたの家といふのは樽だらう。――

(チオゲーネス)

——何だつて好いちやないか。……自分が満足して居れば好いちやないか。……判事諸公、人類を通じて最も賢明だつた不世出の偉人、聖者ソークラテースを殺したのはまだ遠からぬ事だ。……余輩の心中には今尙哀傷の情が深く徹して事毎に痛憤遺恨、紅淚滂沱たるものがある。然るにだ。また同じやうな處刑が今日新たにせられるといふのは何事です。……貴公等も御承知の通り、凶悪無比なアニツスは希臘から最大の哲人を奪つたゞけで満足せず、ダウコン、アナキサゴラス、アルキピアデス、又はベリクレースの妻アスパシヤ等迄も瀆神の理由で處罰した。……併し見られよ、神々の怒りは、ソークラテース及人道のため惡に復讐の斧を降されたのだ。言ふも穢はしい惡黨のアニツスは遂に放逐の憂き目に遭ひ、石を以て擊殺されてしまつたぢやないか。

所がだ。這の前轍を目睹しながら、彼ヴシレアスは、復たもや其先輩の罪惡を繰りかへさうとしてゐる。……斯の如き暴慢は斷然許すべからざる事なのだ。判事諸公は公明且正大である。余輩は凡ての市民の深い憂懼は彼の惡僧賣僧キヤルカス連の跋扈跳梁に他ならないことを御注意申上げ度

5。——  
(ドレアス)

——おい、チオゲーネス。そなたの首を氣を附けろよ！——

(チオゲーネス)

——「神を祀るのに人間の血を以てすべきでは無い。希臘人には是が最後の殺人であらねばならぬ」とは、ソークラテースの死刑に際しプラトーンの云つた詞だぞ。——

(ドレアス)

——チオゲーネス!!——

(チオゲーネス)

——判事諸公は宜しくライスの生活と原告のそれとを比較考量して頂き度い。一は愛に終始し、他は是れ自負、傲慢、憎惡、虚偽の塊りである。——

(ドレアス)

——チオゲーネス！ 俺は汝を不敬の罪で告發するぞ！——

(チオゲーネス)

——勝手に爲るさ。貴様はまだ、密教に眼盲した連中と誣山戯る夢でも見てゐるのか。其麼世迷言は今日では萬人の嘲笑を買ふばかりなんだ。……余輩は慈愛の神は信するが人殺しの神を信じは

せぬ。若し判事諸公が誣告者に棒を喰はして好いと被仰るなら、神様が悪人を守護しないといふ證據を立所に見せてやるが、……

(裁判長)

——最宜しい、デオゲーネス、其方の言ふことは能く解つた。——

傳令使が来て、有ゆる階級の老若男女が被告の爲に陳辯し度いと願つてゐる旨を判官に傳へる。で、裁判長が目配せすると、先づ番卒に連れられて現れたのは、母親と娘達らしい三人の女である。

(母親)

——判事さま、……妾は詩人エウリピデースの母親で御座います。妾がサラミスで、這の二人の娘達と共に、貧苦のどん底に沈みまして、もう飢死により他無いやうな有様に落魄れました時、思ひも寄らない慈悲の手が私達を救ひ出して下さいました。して、幾程もなく、偶然解つた事で御座いますが、それはライス様のなされたこと、知りました折には、什麼に妾共は蔭ながら掌を合せて拜んだことで御座いませう……

(デオゲーネス)

——判事諸公！ ドレアスの主人に其麼ことが出来るか如何か、試みにお訊きになつて頂き度

50

武装した一人の兵士と其家族とが這入つて来る。

(兵卒)

——殿様達、私は、今日こそ私の清い負債、……心からの感謝の負債を果し度いと思つて参りました。三年の間私が、スバルタに虜となりました後で、不見目な私の家族は、此處彼處と迷ひ歩き皆様の御恵みを頂いて儚い活計をして居りましたが、圖らずもライス様にお目にかゝりますと、ライス様は莫大な私の身の代金を拂つて下さいます許りか、これから將來家族の生活出来ませうやうな道迄も立て、下されたのです。もう一生浮びつこの無い奴隷の境界から思ひがけ無く救はれて参りました。私は二本の腕の續く限り、這の新しい郷國コリントスの爲に、……貴方がたの爲に盡さうとして居るので御座います。……殿様！ 若し私が這の恩人を辯護する事が出来ませんでしたら、何卒ライス様の身代りに私を殺して頂き度い!!……御願ひで御座ります。——

子供を連れ其妻が一つ所になつて詞を續ける。

——おゝ、殿様達！ 私の命とわが兒の命をお取り下さい!!……だが神々様の名に誓つて、……ライス様だけは御助け下さい。ライス様は、世の不幸な人達には天からの恵みで御座います。……

(デオゲーネス)

——判官！……市民諸君！……このデオゲーネスは感激措く所を知らないのだ!! 見給へ、見給へ、此處に集つた人達も、悉く感涙に咽んでゐるではないか!——

(若い貴族)

——判官閣下、耻を申さねば解りませんが、併し私は、私の義務を果さなければなりません。……私も私の友達も、コリントスの第一階級の子弟であります。然るに當時私共は、若氣の過誤とでも申しませうか、身分にも耻ぢず淺猿しい放蕩のどん底に沈淪して居りました。それが一旦ライスの賢明な忠告に依りまして翻然無明の夢から救はれたのです。おゝ、ライスこそ洵に賞讃に値する方なのです。——

アフロヂテ一の宮に仕へる尼僧が三人ミルトスを冠にして判官の前に現はれる。

(一尼僧)

——殷富なコリントスの市の判官さま、聽いて下さい。ライスは信仰の厚い御方です。神々に感謝を捧げる心から彼女はアフロヂテ一・メラニスの宮を建立し、吾々を其處の女僧と致したので御座います。彼女に負はされた不信の罪は全く偽りで御座います。——

人民の間から夥しい聲々が響いて来る。

——ライスの名は、吾々の間には慈悲深い女神と崇められてゐるのだ。……彼女は榮譽をこそ受くべきで、……耻ぢしめなければならぬのは寧ろ原告だ……原告だ?——

(レオンチデース)

——國民から選ばれた尊崇すべき判官諸公!……私は敢て諸公に御訊ねしたい。……如何に雄辯な辯護人でも、諸公の只今見聞かれる這の有様に勝る辯論が出来ませうか。が、若し尙ほ貴官等の何人かの胸に些かでも疑問が残つて居るなら、更に私は、原告者がライスに送つた手紙、……而かも彼がレオラスが彼女を掠奪しやうと企てた待伏に失敗した後で彼女に送つた殆んど脅迫がましい戀文を御覽に入れませう。——

と彼は判官に書面を渡し、書面は彼等の手から手に廻覽される。

(ドレラス)

——裁判官! 裁判官!……其手紙は偽造です。……私は此やうな犯罪が神の召使に向つて爲されることは一層厳しく御取締りを願はねばなりません!——

(レオンチデース)

——貴様の言ふ其罰は、貴様と貴様の仲間の受くべきものだ！人間の正義が貴様等を罰することの假令遅くとも、神々の眼からは脱れることが出来ないぞ！！——

(デオゲーネス)

——若し這の余輩がゼウスであつて、此棒の代りに雷様を握つてゐたら、貴様や貴様の主人……一味徒黨を一撃の下に叩き潰して終ふ所だ！……

(裁判長)

——辯護人は、未だ他に辯護する事が有るか。——

(レオンチデース)

——私は最後に一言附け加へ度い。……判官諸公の正義を飽迄信頼してゐる人民は、只管ライスの勝利を待ち焦れて居ります。……尊信すべき判官諸公は、必ずや這のコリントスの市に榮あらしめた稀しい女性、……全世界の賞讃を贏ち得た女を罰するには、餘りに賢明であり、公明正大であると信じます。……願はくは諸公の眼を被告に向けて、よく見、よく判じて頂き度い。——

と、レオンチデースは、ライスを包んでゐた被衣を落した。民衆は眼も放たずに彼女の艶美を見詰めながら、思はず讃嘆の聲を揚げる。

(傳令使の聲)

——靜肅！……叱つ！……靜肅に！！……判決が下されます。——

(裁判長)

——ライスのために辯ずる民衆の光彩ある運動に依りて、元老院は彼女を無罪放免す。——民衆の歡喜は絶頂に達し急霰のやうな拍手は場内を靜謐に整理しやうと努力する傳令の聲を包んでしまふ。——としきり拍手の収まるのを待つて裁判長は後を續ける。

——コリントス市民諸子！！此判決の公明だといふことは同時に又元老院が、神々の手に成れる最も美しい創造を敬するは臆て神を尊崇する所以であると認め、強きを挫き弱きを護る這の神々の愛を價値あるものとして認めたことを同院の上に許されて然るべきだと信じます。市民諸子、氣を附け給へ！元老院は、諸子が原告の人格に充分御注意を加へることを希望します。——

再び割れるやうな拍手が起つて暫くは鳴りも止まない。群集の聲は一つになつて元老院議官の上に讃嘆の獅子吼を送るのであつた。

デオゲーネスは棒を振り動かしながら叫び出す。

——諸君、氣をつけ給へ、だ！！這の大馬鹿者の居周圍を、什麼だ、此棒で撫で廻して可愛がつ



てやらうか諸君!!——

この犬儒の詞を聞くと、群集は嬉しがつてわつとばかりに沸き立つやうな笑聲を揚げる。

(傳令使)

——静かに! 静かに!……聞け、ライス。其方はアフロヂテーの宮居に参詣して、吾々に感應  
あらせられた神の恵みを謝して好からう。——

——ブラヴオー!!——

——榮光!!——

——元老院議官に榮譽あれ!!——

などいふ叫び聲が彼方からも此方からも聞え、欣喜した民衆は無邪氣に騒いで雀躍り出す。……  
ドレアスは守衛に曳かれながら役にも立たないエレウシスの名を、まだ言ひ續けてゐるのであつた。  
レオンチデースはライスの手を取つて議官の前に彼女を伴ひ、感謝の意を表はさうとする。ライ  
スの家の女達、其他彼女の放免を希望して集まつた澤山の人達は等しく判官の座せる高座の前に進  
んで吾先にと花冠を捧げ、又もや拍手が爆發する。

(裁判長)

——レオンチデース將軍! 現時稀に見る這の善行者に滿腔の敬意を表する印に、此冠を取つて  
ライスの額に加へて下さい。——

レオンチデースはライスの額に冠を置いて裁判長に一禮すると斯う述べる。

——コリントス市民の名に依り、また、人道全體の名に依つて私は、斯くの如く記念すべき名判  
決を下された元老院議官に感謝します。無辜を保護し罪惡を罰し、敢然としてエレウシスの祭司の  
惡むべき人格を斥けられたのは實に古今の名判決だと言ふに憚らない次第で衷心から甚深な敬意を  
表さずには居られませぬ。——

ライスと彼女の友達とは、無数の民衆に取巻かれて其處から直ちにアフロヂテーの宮居に詣でた  
が、群集は感極まつて遂に彼女を歩ましめず、恰かも凱旋將軍を迎へるやうに宮居の階段迄美しい  
ライスを捧げ擔いで行くのである。ライスに取りては洵に眞の勝利であり、コリントスの市は元老  
院議官の名判決を永く後世に残さうと金板に之を彫りつけた。……即ち臺座の上に現はれたライスの  
立姿と、是に榮冠を捧げてゐる市民とを配した構圖のメダルが夫なのである。

第十一章

ライス、コリントスを去るに決す——デオケーネ  
スの驍勇——熊のエウリビデース

ライスの一命にも關はる怖ろしい出来事が斯うして一と先づ無事に過ぎ去りはしたやうなもの、此上長く彼女のコリントスに停ることは如何に見ても危険極まる立場であると思はれた。で、レオンチデース、アリスチツボス、ミロン、スコバス、デオゲーネス其他多くの友人は彼女に對し、急遽その郷國を立去ることをば口を揃へて勸告するのであつた。

賢人キセノフオーンは這のヘテイラの女王に言つた。

——若しコリントスの市民が雅典人ほど迷信深かつたら、慄れたライスは恐らく今日このやうに無事で生きては居られなかつたことせう。……コリントスの人達が比較的宗教上の傳説を信じないことは、何にしても貴女に取つては此上も無い僥倖でした。併し貴女は、是で安全だなど、決して氣を緩してはならないのです。……此處は一つ、經驗ある友人達の勸めに任せて郷里を去られた方が宜しいせう。エレウシスの祭司が貴女に加へやうとする復讐は、此告發を最後の打止めとす

るもので無いことは火を見るよりも明かです。今後とも斷えず死の脅威を振り翳して貴女に迫ることとせう。……ヴシレアスは許すといふ事の無い男です。如何なる場合にも彼は其生贄を血祭りに上げねば指きません。……

レオンチデースが詞を次いだ。

——おゝ、ライス、……あのメロスのチアゴラスの話を想ひ起して下さい。私は彼の事件の一部始終をお話爲たでは御座いませんか。——

(ライス)

——噫、仕うしませう妾は。……コリントスから離れることは、永久に、妾を愛して呉れる人達を捨てることで御座います。……妾に取りまして夫は、殆んど「死」に近い事なのです。……

ですけれど、……お友達の皆様が悉く同じ意見なのですから、……妾は御意見に従ひませう。それにしても妾は、夫々書き遣しをしたり、妾の携つてゐる仕事を整理したり、いろんな用事も御座いますから、たつた三日だけ時間が欲しいと思ひます。——  
と、淋しさうに彼女は微笑した。

——三日ですと？……とんでも無い!!……什麼大嵐が其の三日の間に吹き荒れるか、貴女は豫想

しないのですか？……キセノフオーンが彼様言はれますのも、其憂慮を申上げてゐるのです。勿論私も同様に考へる。……貴女は、ライス、何といふ悠長な考を持たれるのです。——

とレオンチデースは反對した。ライスが答へる。

——三日の時間は、如何しても妾には必要なのです。……貴方は、レオンチデース、妾の傍に居て下さい。丁度妾の影のやうに離れずに附いて居て下さい。……勇敢なレオンチデースが保護して下さつたら、誰が妾に手を加へる事が出来ませう。——

——いや、勿論それは、——

と友人の一人が言つた。

——貴女の友達は、孰れもみんな、注意に注意して貴女を保護して居ります。一人だつてライスのために自分を犠牲に供さない者はありません。——

——噫、皆さん!!……妾は、其處にも思つて下さる皆さんと御別れして、……復と御目にかゝる機会も無く、愉快な御話を承はる事も出来ませず、……夫を考へると妾は、いつそ死ぬよりも辛いと存じます。——

彼女は一々彼等の手を取つて涙を流した。彼女の感動は強く、人々の心を捉へた。彼等は、今

更に神の問題を話し合ひ、神に仕へる祭司が、言はうやうの無い悪徳を行ひ、人民が又、之に盲従することを痛嘆した。

ライスは、直ぐさま整理にかゝらうと席を立つて執事バクキスを自分のところに呼んで言つた。

——バクキス！ お前を見ると妾は、何時でも親身の妹のやうに思はれてならない。……妾がさう思つて可愛がればお前も亦忠實に仕へて呉れるし、改まつて言ふのも異なるものだけれど、バクキス、今言つて聞かせる妾の意志を其儘に實行するとアフロヂテーに誓つて下さい。——

這の突然な、改つた要求に、茫然ともし、又何やら重大な問題らしいのに颯つと鈔し色青醒めたバクキスは、申付けられた通りアフロヂテーの前に手を擴げ、顫へる聲でライスの望む誓の詞を述べるのだつた。

——おゝそれで好い。——

とライスは言ふ。

——バクキス、……妾は郷國を發たうと思ふのです。……果ての無い旅に出てしまつたら、多分妾は、コリントスから遠い、所で死んでしまふことでせう。……で、その長あい居守の間、這の家や花園など、此處に在るものを悉皆お前に委ねたいと……

(バクキス)

——おゝ!! 御主人様、……御詞中では御座いますが、何卒、々々、それを辭ることを御許し下さい!……妾の願ひはたつた一つ、……どうぞ御主人様、貴女と御一所に妾を連れてつて下さいまし。……什麼處へでもお伴をして生き死にを一つ所にさして下さい。お願いです……

(ライス)

——それは出来ない、バクキス。……お前に残つて貰ふことは付うしても妾は必要なのです。なぜなら、這の大事を托するのはお前のほか無い。お前ばかりは全く信用が出来人なのですから。其處のところを聞き分けて、バクキス、……斯うなの。妾が郷國を發つたならば第一に奴隷達です。お前のところに残つて居たいと思ふ者は別にして、其他は男も女も、うちに居る奴隷達には一人残らず自由を與へるのです。……それから、妾がクリシデースに預けてあるお金は五百タレントンありますから、その利子として年分五十タレントンは収入ります。で此利子金の三分二は、此家の維持と、貧困に陥つた可哀さうなヘテイラ達を救ふために使ふやうに、さうして残りの三分一は妾の誕生日にコリントスの不幸な家族達に分け與へて下さい。……妾の誕生はムニキオン月の第十日ですから。なほ、若しまた家の費用を節約して餘りがあつたらアフロチテ・メラニスの宮居に奉

納して呉れること、是だけは妾のお前に與へる命令で、永あい留守中お前は正確に是を果して呉れなければなりません。……

あゝ、妾は大事なことを忘れてゐました。……それはチオゲーネスの樽です。本當に好いお友達、あの方はヴシレアスの告訴に對しては極力辯護して下さいました。どうか今度は彼の人の爲に屋根は光つた瓦で葺いた杉材造りの美しい小屋を建て、上げて下さい。……今日からでも急いで建築に掛からして。——

這の詞が終るか終らぬに、突然入口の戸が開かれチオゲーネスが立現はれた。其腕からはタラクラと赤い血が流れてゐる。ライスは驚きの叫びを揚げた。

(チオゲーネス)

——失禮、ライス。突然お話の邪魔をして済まんが、最う此處は、君の居る所ちや有りませんが……這の市のためには、君も随分善行の數を盡したが、是れや忘恩の市だ。尠しも安心の出来る所ちや無い。……實はな、ライス、怪しからぬ彼のヴシレアスの奴め、きつとまだ君を追つかけて廻すに相違無いと睨んだから、余輩は花園の外に一と晩歩哨に立つたんだ。来たよ、来たよ、果して彼の惡僧の廻し者が三人忍んで来て花園の垣を攀ち登らうとしてゐる。余輩は宜うし!! と思つた

から、登らせて置いて、ぐわん!! 例の棒を一發喰はせて三人共、垣の下に叩き付けた。一人は脚を折りおつたが、あとの二人は生意氣に短剣を抜いて余輩に迫つた。……併しデオゲーネスの棒が物を言ふからな。忽ち這の常闇地獄の凶徒を迫ひ散してしまつたさ。――

ライスは自分の被衣を取つて勇ましいデオゲーネスの血を拭ひ取りながら、

――まあ、お勇ましい!……貴女といつたら本當に尠しも慾氣無しで、……心から盡して下さる友情は、何とお禮申して好いやら、……神々様も屹つとお讃めになつて下さるでせう。――

――いや、君が余輩を呼んで呉れる友なる名は余輩に取つてはカリアスの全財産よりもつと尊いものだよ。――

其處へ這入つて來たレオンチデースとアリスチツボスは聲を揃へて、

――うゝむ、如何にもデオゲーネスらしい詞だ!――

レオンチデースは尙もライスの言ひ續ける。

――それ御覽、ライス、私の豫感が實現したではありませんか。――

斯うしてゐる所に又一人、召使ひの女奴隷が這入つて來て、

――長い髯を生やしました謹嚴な御様子の方がライスに一寸お話しがし度いと申してゐらつしや

いますけれど、――

と取次ぐのである。で其案内して來た男を見ると、思ひも寄らぬそれは彼の女嫌ひの悲劇詩人エウリビデースなのであつた。ライスは彼を見て、事の意外に吃驚した。

詩人は言ふ。

――私はミソギネー(婦人の讐)と渾名されて居りますが、事實またその名に相應しい者なのです。併し唯此處で告白致しますが、ライスは屢々、私の作つた短詩の主題になつて居ります。私の誹謗者が何と私を惡口しやうと、エウリビデースの心は、人間としての善行に迄も冷淡無關心なものではありませぬ。……ライス、私は、貴女が私の家族の爲に盡された慈愛の籠つた行ひも、尙又御名を包んで愼ましく爲された奥床しさをも聞きました。私が雅典から大急ぎで此處に來ましたのは今將に貴女の頭上に落ちやうとしてゐる暗雲の兆候をお告げし度いと思つたからです。……エレウシスの祭司の教唆に依つて、雅典の法官等は司法會議を催はし、コリントスの判官に向け二人の大使を送つて今一度新に貴女を法廷に引つ張り出させることに決定したのです。謂ふ迄も無く此處こそは貴女はヴシレアスの憎惡の犠牲となつて一身を失はねばなりません。――

――詩人エウリビデース、心から貴方の御親切を御禮申上げます。貴方の態度は、貴方の御心の

眞直なことを證據立てます。……妾は是以上感謝の詞を存じません。とライスが云ふ。――

(エウリビデース)

――私は私の義務を果したゞけです。左様なら。――

(デオゲーネス)

――雅典の連中は讒談に余輩のことをデオゲーネスの犬といふんだが、……や、もつと穿つたやつが出来たぞ。什うだ「熊のエウリビデース」は。……何方から見ても彼奴は熊だぜ。――

(アリスチツボス)

――猥猛な熊だ、……馴れない熊ですな――

(レオンチデース)

――エウリビデースは、意の欲する儘に動いただけでせう。……が結構でした。彼はライスの、直ぐにも郷國を發たうといふ決心を固めさせて呉れたのです。――

(ライス)

――えゝ。……妾も、今度といふ今度は最も貴方の御意に従ひます。レオンチデース。――

(レオンチデース)

――アリスチツボスやデオゲーネスも、即刻出發といふ私の主張を諾いて呉れますか。――

――勿論。――

――異議無しだ。――

と彼等は答へる。

(レオンチデース)

――では此處で、も一つ提案さしていたゞきますが、一言に盡せば愈々之を實行する役割を決める事なのです。……アリスチツボスはコリントス、雅典の兩市に、當分ライスがアフロヂテーの宮に身を寄せるといふ流言を撒いて下さいませんか。……さうして、デオゲーネス、貴方は、手足になつて働く幾人かの確かりした男達と一つ所に花園の周圍を護つて下さい。今夜も必ずプシレアスの忍びが来て、再びライスを連れ出さうと試みるに相違ありません。……さうしてライス、私は舟を備つて来るから、貴女はレケーの港に待つて居て下さい。……私達二人は友達に別離をつけて今夜の中に出發させよう。――

其晩は幸にも詭へ向きの微風にライスとレオンチデースとは、滿々と帆を孕ませてクリスサの海を航して行つた。

レオンチデースが豫想したやうに、ライスの館はドレアスを頭目とした祭司付武夫の襲撃する所となつた。併し待ち構へて居たデオゲーネスと其手下の者共は、彼等闖入者が花園の垣を登る前に遣つつけてしまつた方が好いといふので、忽ち激しい亂闘となり、ドレアスと、仲間の三人は泥を食つて叩きのめされ、残りの奴等の遁げ走るのを渚の畔迄追跡する。前夜の疵が有るにも拘らずデオゲーネスの力、其勇氣はめざましいものであつた。彼は元の所に歸つて來ると、其處に三人の死骸があり、少し離れて第四の死骸、それはドレアスであることを發見した。

が、此人殺しの嫌疑が忽ちデオゲーネスに掛かつたので、彼は急いで海岸に走り、エーギナの方に向つて今將に出帆しやうとする一隻の船に飛び込んだ。ところが、運の悪いことには其小舟が、コリントスの岸を離れるか離れないに、あはれ海賊の襲ふ所となつてクレータ島の方へと曳かれて行き其地で無残にもデオゲーネスはキセニアデースと名を變へて奴隸に賣られるといふ悲惨な運命に落ちて行くのである。

## 第十二章

ライスのアムバラキア到着——アリスチツボス及クレ  
オンの來訪——舊友——コリントスの俠者エニダマス

航海は都合好く運んで、三日目の夜、ライスとレオンチデースとはアムバラキアの港に錨を下した。レオンチデースの到着したことが知れ渡ると、市の主立つた人達や、數多い友人達は、彼等の間に再びレオンチデースを迎へる喜びを述べやうと集つて來る、翌日は市民の歡迎宴が催された。將軍の傍に侍してゐるライスの美貌、窈窕たる其姿、何ともいへない微笑を湛へた愛嬌など、先づ滿堂の眼を惹いて、誰彼の別無く悉く彼女を嘆賞し、彼女の爲に祝盃を擧げるのであつた。その潑瀾と色彩の多い話し振りや、如何にも洗練された優艶な雅典の都言葉や、涼しい彼女の眼容やが滿遍なく會衆を魅了し惱殺して、忽ちの間に彼女は猛烈な人氣の中心となつてしまつた。彼女は人心の集る頃合ひを圖つて豎琴を取ると、微妙な絲の調べに合はせ、ゼウスとレダの戀の營みを唄ふのであつた。一座は、深い注意に全で水を打つたやう、次いで感嘆の吐きが起る。唄は急霰のやうな拍手に終つて、熱し切つた會衆は遂うく彼女の頭上に金冠を贈り、彼女も亦名譽あるアムバラキア

市民の一人であることを宣言するのであった。

この殖民地に彼女を迎へたことを永く記念するために大理石像が建てられる始末、翌日は、レオンチデース將軍と彼女との壯麗な結婚式が擧げられ、民衆はミルトスの花を冠とし、這の新家庭の柱列廊に推參けて盛に祝賀の詞を述べる。……それから三年、ライスは其新郷國で、衆人から愛され敬はれて幸福な生活を送つてゐた。コリントスに居た時と同様、不幸な者には天の恵みのやうに恵みを垂れ、名も知れない貧しい者、哀れな者を救つたり、彼等の安全を圖つて遣り、従つて其入達からは女神の如く崇められる。……新夫婦の幸福は夫ばかりでなかつた。茲に目出度く一女を擧げることとなつて、ライジオンと名前を付け、他日母親の美を繼承したのも這の人、尊い愛の結晶は一層彼女の仲を融和させ、その結合を益々固くするのであった。

アムバラキアに於ても彼女はコリントス時代の例に倣つて繁々優雅な夜會を催した。其夜こそ眞のシムボジオンと稱すべく、藝術や哲學を論じてアムバラキア國民の心に對して美を愛好する念を誘發したのも全く這の會合の賜物であつた。

尙又、這の殖民地にアリスチツボスの訪問を受けたことは、殷盛なコリントス文明の進歩發達を傳へるに與つて力あつた事は勿論で、一日ライスが、やつと其化粧を終つた頃、召使の奴隸は、彼

女に會見を望む二人の外人が見えてゐる事を報じた。

彼女は、屹度これはコリントス時代の舊友アリスチツボスとチオゲーネスであらうと思ひながら、いそぐと、早く其客人を御案内するやうに命じたのである。

果して、それはアリスチツボスであつた。這入つて來ると彼は、いきなりライスの腕に身を投げ

——おゝ、ライス、……お達者で！——

と感に堪へない聲を上げる。彼女も轉た懷舊の情が胸に迫つて、

——よくまあアリスチツボス、——

と、暫くは詞さへ無いのであつた。

——何ですか、斯う、妾は……夢のやうで御座います。何時も々々妾は、貴方のことを考へてゐました。……あなたと、それからチオゲーネス、……御一つ所にいらつしやれば好いと存じてをりました。お連れは？ 彼の方？……

——いゝえ。道連れはクレオンなんです。……貴女が急いでコリントスを發たれてから、彼の若人はもう、生きて居る瀬が無いやうに萎れかへつてしまひましたよ。……お目にかゝりたがりまし



てなあ……。實際クレオンは、瘠せるほど貴女を愛してゐるのです。――

(ライス)

――まあ……。其處に迄……。妾も、彼の優しいクレオンが妾を愛してゐて下すつた御一人といふことは、能う存じて居ります。併し、今日となりましては、その妾を想つて下さる心を、戀ではなく、友情に代へて頂かなければならないやうに成りました。……今では妾……。レオンチデースの妻なのですもの。妾の身は、自分の氣儘にならないのです。――

と言つて彼女は、丁度這入つて來た、此若い貴族の手を取つた。

斯ういふ彼女の詞を聞くとクレオンは、打たれた人のやうに、睨つと眼を伏せて物悲しげに俯首れてしまつた。遙々訪ねて來た夢も望みも、着くか着かないに斯うして全く絶え切れてしまつたのである。ライスは惜れかへつたクレオンを見て、又更に彼の手を取り、無駄とは知りつゝ、彼女のために胸躍らせてゐる男に優しい慰めの詞を灑ぐ。それから、氣を替へてアリスチツボスの方を向き直ると、

――チオゲーネスは？……仕うして御一つ所ぢや無かつたのです。――  
と訊くのであつた。

――噫、そのチオゲーネス！……とんでもない事に成つたのですよ、ライス。――

愾然にチオゲーネスは、ヴシレアスの間者と激烈な渡り合ひを爲した後で、如何しても殺人の嫌疑が自分にかゝるに相違無かつたので、即刻郷國を捨てやうと決心したのです。……敵方の人間を四人も斃したのですからなあ。……其中にはドレアスも居ました。ドレアスとお聞きになつたら貴女は饗宴の夜から續いてあの告訴騒ぎ、お命に係らうとする迄貴女を脅威した反逆者の事を、よも御忘れでは無いでせう。……チオゲーネスは、何處でも構はない、吐嗟の間です。……丁度其時エーギナ島に行かうとしてゐる小舟の中に飛び込んだのですが、不幸にして其舟が海賊に襲はれ、あはれなチオゲーネスは、仕うもクレータ島の市場で奴隸として賣られたらしいのです。――

――おゝ!! 神々様!! 何といふことを聞かなければならないのでせう。……妾の安全に遁げられるやうにと、幾日か危険に身を曝した後で、奴隸に迄も賣られやうとは！……アリスチツボス、それは本當の話ですか？――

――私が聞き込んだ色々な材料を突合せて見れば、全く事實と思はれます。――

――……さう……。ですか。噫……。否え、妾は斯うしては居られません。仕うしても！……直ぐにもクレータ島に出發しなければ、……そして、假令身の代金が何れ程しやうと、チオゲーネスを

自由の身と爲なければなりません！——

クレオンは是を聞くと身を乗り出した。

——ライス！ その役目は私に遣らして下さい。……私の富と命を懸けて、チオゲーネスを救ひ出したら、貴女は悦んで下さるでせう。……なに！ 貴女の希望を果すためです！ おゝ、ライス。貴女の望みは私に取つては、女王の命令に他なりません。直ぐにも實行致しませう。——

——ありがたう、クレオン。……人を愛する爲に、其勇しいお心を泌々お禮申します。貴方の崇高い御心は決して忘れは致しません。他日きつとアフロチテーの女神さまは、貴方の誠實を讃められるでせう。——

クレオンは、彼女の與へた手に接吻して、其使命を果すため、三日の後にはクレータ島に發つ事となつた。

——夫のレオンチデースは、共和國のために目下出陣して居りまして、暫く不在なので御座います。留守中勝手に訪問を受けます事は、或は欣ばないかも知じませんが、古い御友達としての貴方がたを待遇することは、何等差支無いくと存じますから、お二人を歓迎します意味で、明日は這の館でシムボシオンを催しませう。僅かの間にはライスが、アムバラキア人の心に何れほど藝術や哲學の

趣味を吹き込みましたか、何卒御覽下さいまし。……アリスチツボス！ 貴方が、洗練された哲人だといふ評判は専ら高いので御座いますからお發ちになる迄には、必然々々澤山のお弟子か出來ますことと思ひますよ。

(アリスチツボス)

——貴女の高尙な影響が深く市民に及んでゐることは、私も信じて疑ひません。——  
クレオンは吻つと太息を泄して、

——誰だつてライスの饗宴に楯突く事の出来る人はありません……噫、運命は、……長い間、私の大事に心に秘めてゐた幸福の夢を無残に打毀してしまひました。——

(アリスチツボス)

——かはいさうなクレオン！ 此世のことはみんな運命の掟に従はねばならないのだよ。……が、哲學は、その掟に従ふべき洞察明智を吾々に教へて呉れます。——  
と謂つて、更にライスの方を振りかへると、

——貴女がレオンチデース將軍と結婚した事は幸福ですか？……愛の火は少しも衰へは致しませんか。——

ライスは答へる。

——レオンチデースは、妾の愛人の中で一番誠實な、溫和な方でした。……夫としては最も好人なのです。この結婚は妾を世の中の最も幸福なものと致しました。若し是が幸福でなければ、幸福といふものは何處に行つたつて有りはしないことになります。……愛といふ點から申しますと、……妾は告白しなければなりません、……アリスチツボス、……レオンチデースと妾との間は、最初から愛に依つて結び付けられたものでは無いのです。……

是を聞くとクレオンは、匿し切れない欣喜に顔を輝かせながら、

——では、ライスは、貴女は將軍を少しも愛してゐらつしやらないのですか？——と席を進める。ライスは嚴格な調子で言つた。

——愛の結合は、あまりに脆う御座います。レオンチデースの妾に對する誠實は比類無いものです。さうして彼の人の占めてゐられる共和國での最高の地位、彼の人の御名、彼の人の御身分に對して拂はれる光彩ある尊信など、凡て々々妾共の間柄を一層鞏固なものと爲るに十分なのです。……妾は、レオンチデース將軍に依りまして妾の心に或崇高い感情を覺えました。妾は將來にも、妾の生涯を彼の人のために犠牲にします。……妾の誓ひを破ることは、百度鴆毒を仰ぐよりも、もつ

と妾には辛いのです。——

クレオンは其手で顔を蔽うてしまつた。

アリスチツボスは思はずも叫んで言ふ。

——ゼウスの神さま！ 私は、私共のマトロナ（羅典語、主婦の意）の心の中には最も森嚴なものがあるといふ事が判然解りました。……此やうな美しい感情は、何處を搜したつて他に有りはしませんよ。……ライスは、貴女は實に、女性の名譽であり、私達の敬愛と讃嘆とに値して餘有る方ですなあ。——

ライスは、この二人の友を美しい花園に案内した。其處にはもう御馳走の仕度が出来てゐる。彼等は、ライスの出發後コリントスで起つた事件を夫から夫と話し合ふのであつた。

その後、ライスに對する告訴がヴシレアスの讒誣であつた事が證明されると共に、コリントス人の希望も有つて、市民は雅典の元老院に、エレウシスの惡祭司を處刑するやうに頼つた事、勿論それは雅典側の拒絶する所となつた経緯、斯ういふ譯で、元はといへばライスの居なくなつたことから、コリントスが孤立の立場に陥るといふ重大な結果を産んだ筋道などを、アリスチツボスの得意な辯説で事も細かに話して聞かせる。

で、遂にコリントス雅典の同盟が破れ、雅典の艦隊司令官ネオクレースは、戦艦を卒めてコリントスの港に進撃すべしといふ命令を受け、兩國の間には既に宣戦が布告されたが、其時、偶々ヴシレアスが頓死した。或者は、其原因は極度の憤慨から腦溢血を起したのだと謂ひ、或者は毒を仰いだのだと言ふ。

エバミノングスの指揮するテーベ軍の戦勝が、希臘全體の標的となつたのも丁度此時代のことであつた。レウクトレスの戦が同將軍の勝利に歸し、そのスパルタ側に傾いたことは、雅典に取つてもコリントスに取つても共に憂慮の種となり、次でアストロス及シキオニアの落城に兩國の不安は一層加はつて來たのであつた。さうして、遂にテーベの軍隊はコリントスの城壁に迄も肉迫するやうな有様となり、事態は容易ならざる急を告げたが、……此際雅典人は、スパルタの勢力を奪ふ唯一の手段としては、這の旭日の勢にあるエバミノングスと同盟する事であるにも拘らず、仕ういふものか反つて反対の方策に出で、キャブレアスを司令とし、陸兵及艦隊を是に送つて反抗を試みたのであつた。そこでテーベ軍は急遽コリントスの戦陣を撤し、ベオシアに引上げた、コリントスは爲に全きを得たのであるが、這の重大事件の起つたのも畢竟するにコリントスと雅典の間に隙を生じたが爲であつて、前にも言つた通りライスの問題が基因を成すのである。最も有りさうな話である。

アリスチツポスは縷々として語つた。ライスは嘆息して、

——まあ、妾が出發してから、其慶大事件が起つたので御座いましたか。……始めて伺つて一々驚かれる事ばかりです。……では、コリントスは籠城のため嘆苦しんだことせう。——  
アリスチツポスが答へる。

——否え、慥しも……御安心下さい、コリントスは、相も變らず富み且榮えた美しいヘテイラの市です。踴躍たる溫柔郷、……歡樂の夜の市なのです。……唯、茲に一つの思ひ出が市ぢゆうを悲しませて居りますが、他でもない、それはライスの居られない事ですよ。——

(ライス)

——ですけれど、戦に巧みなエバミノングスの勝利はコリントスの富に悲しい一撃を與へはしなかつたので御座いますか。——

クレオンが言つた。

——アリスチツポスは貴女に申上げる事を略しました。それはエバミノングスが雅典人に對して、あの傲慢なスパルタ人を抑壓するため共同戦線を張り度いと持ちかけたのでしたか、雅典人は夫を拒絶したのです。若いフォークオンや私が、極力然うすべきだといふ事を説明したのですが

其努力は結局何の役にも立たず、遂にスパルタ人のためにピレオスの城壁を破壊され、茲に彼等に依つて三十暴君の政府が築かれる事となり、雅典人はテーベとの同盟を拒絶した爲、反つて不倶載天の敵の申出を承諾して是と結ぶの餘儀ない立場になつてしまつたのです。――

(アリスチッポス)

――前々から雅典には、日増しに暗雲が漲り罩めて、陰謀や背徳の行き渡らない隈も無く、賢明な元老院の聲明も、大衆の吠聲の前には何等の效も無いやうな状態で、愚昧な民は迷信と罪惡とに充ち充つるといふ有様だつたのですなあ。……アルギスの戦勝に其凱旋將軍を十人迄も死罪に處したと、ソークラテース、ツラシメーネスの死刑、アナキサゴラス、アルキピアデスの處罰、其他貴女も御承知の通り、共和國の最も偉大な人々は悉く亡ぼされてしまひました。夫に比べると郷國コリントスは如何にも穩かな、ゆつたりとした市で、哲學を研究するには好適の地ですよ。――

(クレオン)

――全くアリスチッポスの言はれる通り、私も雅典人の移り氣にはうんざりして終ひました。……若しライスが再びコリントスに歸られるやうなことになりましたら、斷然私はコリントスの市民にならうと思つて居ります。――

ライスは微笑しながら

――妾は、何時でも懐かしいコリントスが心から離れないので御座います。……私に取つても雅典人の仕打が甚面白くないと思はれる事が有つたのですもの。アスパシヤに對して彼の人達の爲した耻づべき行ひをお話し致しませうか。

さう、……かれこれ最う十年にも成りますが、妾が雅典でアスパシヤと最後のお別れを爲やうとしてゐた頃の事です。……齡としては最う不足の無い老境に達しては居りましたが、有名な這の女性は、誠實な少數のお友達からはまだく騒がれて居りました。最後の瞬間迄高尚な智識と優しい心とを持ち續けて居られた方で御座います。彼女は妾の手を取りながら、斯う被仰られるので御座いますよ。……斯うして、多くの人達は、もう昔のアスパシヤを忘れてしまつて居るにも拘らずお前が變らずに盡して呉れる心持に洵に有りがたいと思つて居ます。妾も曾てはヘテイラとして皆様から最も欣ばれた者でありましたが、お前は、ライス、お前は唯愛嬌があるばかりではない、美しくもあり、第一親切です。お前の善行に依つて必つと凡ての人達から愛されるに相違ない。お前も、一度は妾の弟子だつたのですから、今妾の言つて聞かせる忠告も小耳に聞いて置いて下さい。なんでも、幸福に生きやうとする爲には、常に確かりと自分で自分の頭と心を支配する主人となつ

て、己を忘れず、情に流れないことなのです。女として生きる幸福の秘法は其處に在ります……と斯う被仰います中に、彼女の手は私の手の中で顫へ、眼を閉ぢられて、是を最後の詞に息を引き取られたので御座います。……當時最も著名だつた此婦人は、幾人かの友人に取り巻かれながら、斯うして淋しく命を終られたのでした。ペリクレースに政治や雄辯の教養を與へたのも彼女でした。ソークラテース、アナキサゴラス、アルキピアデス其他雅典の有名な人達が、彼女に倣つて禮儀なり趣味なりを學んだことも決して尠くはなかつたでせう。其人は今もう亡いので御座います。ところが付うでせう。雅典の市民は、彼女が這の共和國の主領たる人の妻でなくなつてからは、或る家畜販賣人に再婚したといふ理由で、彼女の遺骨をペリクレースの墳墓に收めることを拒絶しました。何といふ恩知らずでせう。あの人は、早くも最う、アスパシヤが雅典の光りの一つであつたといふことも、またペリクレースの大世紀だつて、彼女無くしてはあのやうに立派なものでなかつたらうといふこともすつかり忘れてしまつたので御座います。で、妾はバクキスと共に、彼女の遺骨を受取りますと、あのヒメトリス丘の中腹に在る舊友が持つて居りますダモンの花園の内に埋葬する事に致しました……。

もう一時も彼の地に居りますのが厭になりまして、その翌日妾は忘恩の雅典に永久の別離を告げ

てコリントスに参りましたので御座います。……夫から僅か経ちますと、コリントスの平和を亂した大事件が起りましたので、妾は一時エーギナ島に避難しなければならぬことになりました。スパルタ人はテーベに暴君政治を布きましたが、彼の勇壯なベロピダスは、丁度ツランブーロスが會つてスパルタ人を逐ひ出したやうに、彼等を這の都から放逐したので御座います。……妾は、軍國主義のスパルタ人を愛することは、付うあつても出来ませぬ。タイゲイトン（山の名）の傲慢な山男達……：：：厳格な其風俗は、假令評判が好くつても、開明國の人達と同じやうに矢つ張り彼等に附随した背徳が嚴格といふ名譽を傷けてゐると思ひます。第一の缺點は人間の感情を持たないことなので御座います。アリスチツボス、貴方は這の人民に對して、付ういふ御意見をお持ちでいらつしやいますか？——

……私の考も同じことですよ、ライス。彼等の傲慢であり、貪慾であり、悍猛であるといふことは斷えず耳にする所ですが、スパルタ人の愛といふことに就いては一度だつて聞いたことが有りません。彼等の道徳は、例へて見ますと、雅典人の凝つた料理に對する薄穢い煮汁のやうなものでせうよ。スパルタ人と謂つたら、先づ、山羊の毛で出来たベプロス（笠）を被つて歩くといふやうな野性を帯びたものなのです。……私は、文明の進歩は、人生の安易に最も都合の好い方法を適用す

ることに依つて生れるものだと思います。タイゲートンの山地に住む野蠻人に讃辭を呈しやうとは思ひませんなあ。——

——私の意ふ所も全く同じです。——  
と、クレオンが言ふ。

ライスは附け加へて、

——妾は、何時も考へる事なのですが、彼の共和國の誇りかな態度の裡面に匿れた真相を何とかして知り度いものでは御座いませんか。……が、今以てまだ心ゆく迄妾の智識慾を満足させて呉れる方にお目にかゝつた事が御座いませんの。……曾つてアスパシヤが妾に、アルキピアデスが其國に滞在致しました折の或挿話を物語つて下さつた事が御座いますけれど、それは唯、スパルタの女性も、吾々の國と尠しも變る所が無く、愛の力に其身を任かせるといふだけに過ぎませんでした。——  
アリスチツボスは叫んで言ふ。

——それや當然ですとも！……併し貴女の望まれるスパルタ人の私的生活の内容を知るといふこと、……殊にスパルタ人の口から夫を聞くのは非常に困難なことでせう。——  
と、其處に、召使の奴隷が遣入つて来て、

——御主人様、只今、一人の武装した男の方が、コリントスからと申しまして、貴女に御面會を願つて居られます。——  
と彼等の話の腰を折つた。

クレオンは遽かに立上つて、這の國外人が何者だか見て來やうとするのであつた。心の中には、又もや敵の間者ではないかと警戒するのがその峻しくなつた顔色に讀まれる。

併しライスは、次の詞でそれを引き止めた。

——否え、貴方、宜しう御座います。コリントスの御方でしたら何方も親友の方ばかりなのでから……。では、其方を御案内申上げて。お目にかゝつてお話し致しますせう。——

少時経つと、奴隷に案内されて來た一人の兵士が、いきなり彼女の前に平伏し、心から發る聲で言ふのであつた。

——おゝ、ライスさま。……私の此處に参りました目的を申し上げます前に、……詞では申し上げ切れない心からの感謝を述べさせて下さい。……然うです、々々々。貴女は御存じありませんとも。何しろコリントスの廣場で、……あの恐ろしい裁判の折、裁判官さま方の御座らつしやる高臺の前で、たつた一度お目にかゝつただけで御座いますから……私は、メッセニヤのエユダマスで御座いま

す。スパルタで私は三年といふもの酷い目に逢つて居りました。それが、貴女の御慈悲で身受けされたのです。……貴女から自由を得させていたゞく許りか、家族の安全迄も保証していたゞきまして、……噫、結構な方です。神様の御褒めにあづかる御方です。……それ以來といふもの、……私の命、……私の血は、貴女さまのもので御座います。私は、這の……這の、……感謝を果すために什麼に欣んで血と命とを捧げませう。……何時でも！……何時でも！——

ライスが答へる。

——まあ、エユダマス、……好いからまあお起ち！……困る時はみんな同しです。援助の要る時に好くして上げるのは誰でも爲なけりやならない義務ですよ。さうするのが、誰でもない自分の幸福ですし、又、然うする事が、僅かばかり盡して上げた方の美しい感謝と成つて花咲くのですもの。……さ、お起ち、勇ましいエユダマス、起つて此方にお掛けなさい。さうして、貴方の來られた目的を話して下さい。——

——おゝ、ライスさま。……コリントスの方達が貴女に捧げた譽の通りです。……貴女は神様、……神さまのやうな御方です。そのコリントスの人達が、貴女のいらつしやらない悲しみを這様に永く耐へたのが寧ろ不思議です。能くまあ我慢したと思つて下さい。……貴女がアムバラキアに難

を避けられたといふ知らせがあつた其日でしたよ。群集は廣場に駆け集りまして、自分達の善行者が何卒歸國せられるやうにと、願つて、願つて、……大きな聲で叫んだのです。それから這のやうなことが幾日も々續きました。段々と市の治安を亂すやうに成つて参りまして、スコパス先生の御作の、貴女の像は、アフロチー様のお社から奪ひ取られて大廣場に運ばれます。數の知れない程澤山の人達が貴女の像を取り囲みまして、花と冠とで像も何も見えは致しません、全で雪崩れでも有つたやうに貴女を包んでしまひました。元老院のお歴々達も、是には心底感動して終はれまして、お集會を催しなされる。其席上で、貴女、人民中の辯口者が起ちましてな、ざつとまあ……拙い口眞似で御座いますが、這風風に申すのですよ。

「諸君!!」……とな「諸君、コリントスの人達は、其好い女神の不在に涙を流してゐます。吾等の傷口を塞げ、吾等の哀みを拭うて呉れる慈悲深い手は、今もう何もありません。……吾々はライスを喚び返へすことを希望します……」

さう申しまして、それから無數の聲々が、力を罩めてライスさまのお名を繰り返すのでしたよ。元老院の院長さまが、御自分のお話を聞かせやうと聲限り努められますが、這のまあ魂消るやうな騒擾の中での、仕うして、仕うして……。何がさて番兵が早や、人民の浪に押し返へされて居



ます。……私は、此際何とかせにあ、と思ひましたものですから、先づ人浪の上に頭を出さなければ仕うにもならないものですから、一兵卒の肩の上に乗っかりまして、肺の臓の張り裂ける程、力一杯に叫びましたよ。

「兄弟諸君！ 私は君等と同じく市の一員であります。諸君と同じく私はライスさまの恵みを受けました。此處に居られる方々は私と同じやうに感謝と尊敬とを持たないものは無いでせう。……併し、神々さまの御名に誓つて！……吾々の恩人のゐらつしやらないことが混亂無秩序と暴動の原因となつては成りませんぞう！！……静まつて下さい。……私は、命に掛けて諸君にライス様をお連れ申すことを誓ひませう！」

と、斯う申しますと、當り前ですなあ、騒擾と叫び聲とは、びつたり落つきましたよ。

賛成！ 賛成！

出来した、く

といふ聲が幾萬とも知れず空の高あい所迄も響いて行きましたつけ。……元老院長さまは橄欖の枝を高く差し上げて周圍を靜かにさせてから、私に向つて被仰いました。

「勇ましいぞ、エユダマス！ お前の誠實な證として、私はお前を百人の長、ベンチコスタルコイ

と爲てやらう……」さうして一段と聲を高められました、

「元老院は、エユダマスの申出でを承認し、ライスを吾等の城壁中に連れ來ることを委任す。」と斯う嚴かに被仰います。

この詞を聞いて、歡聲が又新しく起ります。……それから段々靜かに成つて、群集は緩つくりく市の方へ流れ去りましたが、……私は仕うしてもお連れしなければ……！

斯ういふ譯ですライスさま、私の使命の目的と申しますのは。――

ライスは感激して是に答へる。

――噫、……コリントスの善い人達！！ 其人達が私に持つて下さる愛情を、什麼に妾は嬉しく思ひ、幸福に感ずることとせう。……エユダマス！ さういふ事を知らせに來て呉れたのは本當にありがたう。……愛せられ且惜しがられるといふことは什麼に心地好い事か知れません。――

――では、ライスさま、……お、貴女は御承諾して下さいさる！――

――まあ、お待ち。……今ではもう妾は、受ける受けないの勝手な處置が出来ないのです。妾は自分のものではありませんの。……妾はレオンチデースの妻になつたのですから、彼の人が決めれば、それに従ふばかりなのです。――

——と被仰いますと、ライスさま。コリントスの市は、永久に、最も尊い市の矜りを失つてしまひ、民衆は二度と其偶像を拜むことが出来ないといふ譯でせうか。——

思はず知らず太い息がライスの胸から出た。

エユダマスは續けて言ふ。

——あゝ、否、否、さうぢやない。……レオンチデース將軍さまは、野蠻人ではゐらつしやらない。……彼の方は、自分の憧れて居られる方を永久に隠遁させて置くといふやうな酷い方では無い……無い。コリントス人に對して、其賞讃の標的であり、慈愛の女神であられる方を私するなんて決して爲さらないに相違無い。——

ライスは、コリントスといふ唯一つの名を聞くさへも、むら／＼と歸心が動くのであつたが、じつと其急る心を押へて、自分の置かれた義務といふ立場から、次のやうな詞で靜かにエユダマスを訓すのであつた。

——レオンチデース將軍は、遠からず其派遣地から歸られる事に成るでせうから、貴方の使命も必ず果される事だらうと存じます。……唯妾は、先程からも申す通り、歸るも歸らないも決定する権利を持つて居ないので、今直ぐ、どうと決めるわけには行かないのです。解りまして？

エユダマス。……さ、それで好い。

で、訊き度いのは貴方の御家族のことですが、夫から如何してゐらつしやいます？お達者？——。

エユダマスは叮嚀にお辭儀を爲る。

——私は、恩人の居られる處から離れて、他の國に住み度くは御座いません。……萬一レオンチデースさまがコリントス人の願ひを拒絶されたら、私は、……ゼウスの神様に誓つて！ アムバラキアの市民に成ります。——

アリスチツボスが詞が挿んだ。

——感謝の心といふものは、今日の世の中では見る事も稀な美德となつてしまひました。勇敢なエユダマス、君はそれを持つて居られる。私や私の友達に取つて斯ういふ氣概に接する程欣快を覺える事はありません。——

——只今の世間では眞實仰せの通りで御座います。貴方の仰せ位純なものは御座いません。……私の腕も命もライスさまに捧げたものです。ライスさまの爲に私の體軀を御用立てることの出来る其日は、私の生涯の最も美しい日なのです！——

ライスは微笑しながら

——まあエユダマス、さう迄興奮なさらなくても好い事なのですよ。今日に限つた誠では無いのですから——

——ええ。ええ。それは何時でも！ 何に依らず力のあらん限り盡し度いと思つて居ります——

——あ、然う、々々。貴方はスパルタにゐらつた事が御座いましたね。——

——居りましたとも！ あれを忘れて成るものですか！ 思ひ出しても戦慄が出ます。彼の國で送りました艱難苦勞の三年、……若しもライスさまのお恵みの手が有りませんでしたら、多分私は今以て彼處で悄れ切つて居ることです。——

——さうだ、エユダマス、——

とアリスチツボスが側から言つた。

——今しがたですよ。君の來られた時丁度その話をしてゐたのです。ライスは、スパルタ人の實情を聞き度いと熱望してゐられるのですよ。……君は其地に居られたんだ、全くお誂へ向きといふものです。君よりも好く其希望を満足させ得る者は、恐らく他に有りませんよ。——

——ライスさまの一寸したお望みも、私に取つては絶大な命令です。……スパルタと聞きましただけで、私の心には彼の恐ろしい記憶が甦へりますが、なあに、それで恩人に御満足が與へられ、

ば這麼幸福な事は御座いません。——

——美しい感じに充ちた御心であらうしやいますこと、——

とライスはまた

——貴方のやうな方が友人の中に居りますことは妾の矜持で御座います——

エユダマスは満足し切つて一つお辭儀をする。

——では斯う致しませう。貴方は妾の願ひをきいて下さると被仰いますから、其お話は明日の楽しみに延ばしませう。妾一人で承はるのは勿體ないやうに思ひますから。……明日はアムバラキア一流の人達が此處に集りますし、皆様もスパルタの話をお聴くことは什麼にか興がるに相違御座いませんから。——

ライスは盃を満した。さうしてエユダマスの使命に就いて暫時話し合つた後、三人の友人は明日を約して其部屋に退つた。

翌日は、アムバラキア選り抜きの人達ばかりが多勢ライスの家を集つてスパルタの話をお聴かうとするのであつた。エユダマスは其恩人を恟ばすことを思ひ、欣然として語り出す。

——ライスさまはスバルタと其住民の歴史的な話を私に望まれましたが、其御研究心を満足させることは私に取つては甚だ容易なことなのです。私が彼處に捕虜となつて居りました間に、這の瘴悪な民族の起原や風俗に就いて澤山の文献を集めました。文献と實地の見聞とを基礎と致しましてかいつまんでスバルタの御話を致しませう……

と、エウダマスは、トロイの陥落後六十年にして半開の土民ドーリア人が此處に定住した事から説き起して、事細かに現在に到るスバルタ人の歴史と風俗、取り分けて尙武の陰に匿された其私的生活の物語りを倦まず勞れず雄辯に話しづゞけるのであつた。

それが終るとクレオンが、ライスを始め、此處に集つた人達の希望に應じて雅典と住民の話をする。取分け美術や哲學や、ヘテイラの事、尙進んでは男色其他反自然な情慾のことに及んだり、市の立法を論じたりして、此シムボシオンの興趣は何時果てさうにも見えなかつた。

### 第十三章

レオンチデースの死

クレオンが長い物語りを終つた時、一人の士官が訪れてライスの前に案内を乞うた。許されて彼は、這入り來て彼女に敬禮をさしげると、黙々として其持つて來た急報を差出すのである。ライスは心配げな様子で其書面を披いて見たが、突然悲しみ極まつた溜息を泄すと、花の冠をかなぐり捨て、長い被衣で頭を蔽うて突つ伏してしまつた。

會集の眼は凍り着いたやうに彼女に停まる。何とも知れない深い沈靜が一座を襲うた。聽て皆人の沈黙した顔の上には段々と絶望の色が浮ぶ。稍あつてライスは力無げに其急報をアリスチツボスに手交すると、

——読んで下さい、アリスチツボス。……アムバラキアの方々に、妾を打碎いた恐ろしい不幸を告げて下さい。——

と、辛うじて言ふ。

アリスチツボスは讀む。

——テスサリアの軍隊は惡戰數時、遂に敗衄して拾收し難き混亂に陥り、我軍は赫變たる優勝を博したるが悲しい哉、這の激戰に、勇壯無比なるレオンチデース將軍は戰死せり。……

是を聽くと、一座は愁然としてライスの例に倣ひ各自戴いた冠を取り去り、華やかだつた宴席は一朝にして黒い喪の幕に覆はれてしまつた。

レオンチデース將軍の死が市中に傳へられると、市民は暗然として悉く喪に服した。それも其筈か、アムバラキア人に對するレオンチデースは、實に、雅典人に於けるペリクレースのやうなものであつたのである。ライスの家の欄間は黒布を以て覆はれ、柱列廊の柱と柱との間には葬儀用の炬火が點ぜられ、凡ての官廳、學校、劇場、其他公衆の建造物は戸を鎖した。哀悼は全市を蔽ふ。

遺骸を迎へる使者に立つたエユダマスは、其翌日、一隊の儀仗兵を従へ、變り果てた將軍の遺骨と、桂に飾られた武具とを奉持して到着する。政府各方面の代表者は、嚴かに夫を受取ると、巨費を投じて故人の高位に相應はしい葬儀を擧げた。百人の若い戰士は手に桂の枝を持ち、蘭を冠として葬列の道筋を整理する。百人の若い娘達は、花の冠と絲杉の枝とを持つて行列に扈從し。その先頭には新しい寡婦のライスが、頭部に銀色の涙を散らした黒布を纏つて惱ましげに重い歩み運び故將軍の親友達は、遺骨を收めた靈壺の周圍に團圓形の列を造り、止みがたい悲愁を包んで絶え入

るやうな笛の音につれ靜かに行進を續けるのである。哀曲の節々には、號哭するやうな法螺貝の音が人の心を掻き撚るかとはかり響いて来る。

行列が小山の中腹に着すると、葬儀長は其處に設らへられた齋段の上に靈壺を安置して神々に祈る。百人の童兒と百人の童女とは一人づゝ其持てる冠を齋段の周圍に投げ、葬儀の舞踊や、灌奠の式のはれる間、喪主のライスは大理石の墳墓に俯首して愁然と其額を手もて支へてゐるのであつた。聽て這の哀しい葬禮も終り、故人の妻女は若い娘達に伴はれて力無く己が館へと足を運ぶ。アムバラキアの習慣として爾來十日間といふもの彼女は戸を鎖して何人にも會はず垂れ込めて居らねばならないので、恰かもそれは、新しい寡婦の涙をば流されるだけ流し盡し、悲しむだけ悲しませやうとするが如くである。

十一日目の朝、其役の人が來て館の扉を開き、

——レオンチデース將軍の寡婦、今より貴殿は貴殿の自由たるべし。——  
と、宣して行つた。

籠居の期間が過ぎて最初に彼女を訪れたものは、アリスチッポスとクレオンと、エユダマスとの三人であつた。ライスが又更に亡夫のことを思ひ起しては、盡きぬ悲嘆に泣き濡れてゐるのを見て

彼等は色々と彼女を慰め勞はるのである。

ライスは言ふ。

——夫を失つた痛手は再び元にかへすことが出来ませんが、彼の方の影響は妾一生持ち續けてゐるのでせう。……榮譽あるレオンチデースの御名の光輝はライスの身の上にも反映して居ります。總ての人達は、妾が會つてコリントスのヘテイラであつたことを忘れ、將軍の令夫人として妾の前に叩頭しました。……この寛厚な方と結び付いた綱は今最う切れて終ひましたけれど、感謝と尊敬は常に妾の心に生きて居ります。……噫、今後支持者無しに此外國の地に在つて、妾は……何うしたら好いのでせう……

エユダマスは言つた。

——ライスさま、私は貴女に申し上げ度い。……コリントス市民から私が特派されたことを思ひ出して下さい。私の役目は、郷國の人達の愛着と憧憬とを貴女に傳へ、再び彼の地に歸られるやうに懇願することでした。……是は、決して、ヘテイラの最も美しい御方としてなど申上げてゐるのでは御座いません。……コリントスの市の氏神のやうにして御迎へし度いと申して居るので御座いますよ。——

(ライス)

——這麼立場になりまして、如何したら妾は好いでせう……。アリスチツポス、……クレオン、……何卒教へて下さい。——

アリスチツポスが應へて言ふ。

——假命は樅の樹の倒れる折には、幹に絡んだ蔦は一つ所に倒れてしまはねばなりません。……私は貴女に、出来るだけ速くアムバラキアを御捨てになることを御勧めします。支への人を失つた貴女が引續いて此處にゐられるのは策の得たものでは御座いません。……恐らく貴女は忘れられて、……

(ライス)

——クレオンもアリスチツポスと同じ考でゐらつしやいますか？——

(クレオン)

——はい。矢つ張り左うとしか考へられません。……一刻も早く思ひ出の地を……

(ライス)

——離れませう。……では妾も皆さんの御意見に従つて。——

エユダマスの聲は筒抜けた。

——おゝ、神々さまの御恵みです。……その御決心で、私は救ひ主ライスさまに私の一生を捧げる事が出来るといふもの、……よく、御決心下さいました。——

ライスは、斯うしてアムバラキア出發の準備に取りかゝつた。レオンチデースの残した富の大部分をアムバラキアの哀れな家族達に分け與へた後彼女は、此殖民地の住民の賞讃と愛惜とを受けながら、又もや郷國コリントスへと、萬感を胸に包みつゝ船路の旅に就いたのである。

## 第十四章

ライスの歸國

ライスがコリントスに歸つたことは、眞に凱旋のやうな騒ぎであつた。市民の盛な歡迎は殆んど極端で、全で女神のやうな名譽を彼女に捧げる。彼女は、ミルトスや薔薇で編んだ天蓋を翳してアフロヂテーの宮へと伴はれ、社には尼僧達や彼女の執事バクキスが待ち受けてゐて、三日間といふものは其歸國を壽ぐため市中擧つて時ならぬ祭典が擧げられる有様であつた。

ライスは此時芳齡正に三十三、其姿は層一層完璧となり、其美は以前にも増して輝いた。やんわりと乳房の膨れて來た事なども反つて豐艶な曲線に其形を整へ、その顔容の清々しく、微笑には愛嬌滴り、會つて其人と語る時は、言はうやう無き精神的魅力の益々圓熟の境地に達したなど、錦上更に花を加へて完全な女を愈が上にも完全にしたと稱して可からうか。

アムバラキアに赴いて三年、久瀾振りで我家に歸つたライスは、爾今の自分の生涯を友情と、文學、美術、哲學の研鑽進歩とに捧げやうと固く決心するのであつた。曾つてありしが如く其館はコリントス上流階級の會合所となり、愉快な夜會は希臘全土の花として見られ、前後二十年の歲月を

ライスは市民崇敬の中心と成り、標的となり、その懇切寛厚能く不幸な人を救つたことは特に民衆の敬愛と感謝とを深め、一層彼女を尊いものとしたのであつた。這の多幸の長い半生に彼女が屢々シムボシオンを催し、當時の偉人が來り會したことは後世迄もよく知られてゐる事實である。

× × × ×

## 補遺 彼女の面影

### 第一節 シムボシオン

シムボシアルコス・バシレオスとしての

アリスチツポス

ライスは、一人の女の友が不幸に陥つてゐるので、夫を援けやうとエーギナに赴いた。彼女が不在となつたので、友人達は、十日目毎に行はれることゝなつてゐたシムボシオンに、彼女の代理としてアリスチツポスを司會者(シムボシアルコス・バシレオス)とし、一切を彼に任かせる事にした。コリントスに在住する國外の著名な人達は相も變らず這の有名なヘテイラの館に招かれん事を希望するのであつた。

シムボシオン開會の合圖があると、アリスチツポスは起つて其辭を述べた。

——今日は、私がシムボシアルコス・バシレオスとして這の會合を開くに當りまして、主人ライスの言行を鈔しばかりお話しして見度いと思ひます。……ライスの誕生。その幼少時代は、私は充分承



知して居りませぬ。又其詳細を明かにする事はさして必要が御座いません。彼女の十六歳になつた頃の事から御知りになれば澤山だと私は思ひます。

その年であります。彼女の美しさ、其の善き素質、精神は、レオンチデースと名くる此地の老貴族に知られまして、遂に同家の養女となり、レオンチデース老人の亡くなられます際に其全財産が彼女に譲り渡されたので御座います。が彼女は這の財産を私することなく、殆んど悉く愛のため、慈悲善根のために用ひました。即ちライスは、その相續いだ富を三つの部分に分ちまして、第一、全額の三分の一は養父の葬儀費用に當てましたが、それは洵に王者の葬式のやうに立派なものでした。第二に、其失費を控除した残額の半分は悉くコリントスの貧民に分與し、あとの半額を保有して自由の女ヘテイラの費用に充てたので御座います。斯くて彼女は、哲學者、詩人、美術家等と繋々相會して其精神を研ぎ、彼女の富を全く自由に消費したのです。従つて彼女が此地に居られない間はコリントスは喪中のやうに暗う御座いました。……斯ういふ彼女の慈愛懇切の行ひは數限り無い次第ですが、今彼女の面影を偲ぶため、最近の二三を引證して見たいと思ひます。——と言つてアリスチツボスは、引續き彼女の逸話を語り出した。

## 話の

それは此花園の噴水を修理した時のことであつた。其時雇つた一人の職工が、不圖ライスの館の笛吹く妓を見て遽かに焦れ出し、激しい戀が彼を奪つて殆んど身も心も無く、自分ばかりか家族の生活迄も全で滅茶々々にしてしまつた。這の男は、多勢の家族の父として、此日までは靜かな、幸福な生活を送つてゐたのである。が、其妓を見染めてからといふものは悉皆理性を失つてしまつた者のやうに、持物の凡てを片つばし賣り拂つては高價な首輪、腕輪などを買ひ求めて妓に贈物をする。妓も又、ライスには内密で其贈物を受取ると言つた具合で、あはれな職工の家族は忽ち破産の憂き目を見、その日をさへも過しかねる赤貧に陥つてしまつたのでした。

一日ライスが駕籠で何處へか出掛けた折、乗りものは偶々、三人の未だ幼さな子供達と、尠し齡嵩な娘の子に取巻かれた一人の女乞食の傍を過ぎた。彼等は手を延べてライスの施しを願ふ。ライスは一片の金貨を與へて其儘通り過ぎやうとすると、駕籠昇きの若い男衆がうつかりライスの名に口を迂らしたのを聞いて、乞食は遽かに金貨を叩き付け、怒りに顔を蒼白にしてつか／＼と進み出で、何やらライスを罵らうとする。……が、再び美の輝きに打たれてたじろぐ様子、果てはばつた

りと地面に身を投げて叫ぶのである。

——お、お許し下さい。……ライスさま。今妾は、思ひつきり貴女を呪つてやらうと思ひました。何故つて、貴女は御承知が無くても、妾達のこの不幸は、……貴女の所爲だと、恨んで恨んで居りましたよ。……が、斯うして貴女に立向つて、現在神々しい美しさを見ますれば、這塵御身體に、其塵腹黒い魂が匿れてゐやうとは仕うしても妾は思はれません。……ライスさま！ お見上げ申した通りの御方なら、貴女は善人であらわれます。……

この詞に驚いて、ライスは其説明を乞食に要めた。が、其女が一寸口を開くと、もう一切の内容が解つたので、ライスは彼女に自分の金囊を與へ、明日自分の館を訪ねるやうに願つたのである。翌る日になると、此女は十四に成る姉娘を連れてやつて來た。ライスは其笛吹く妓を喚んで、職工から貰つた腕輪や首輪を返還さしめ、即刻其女を館から放逐した。さうして母親の方に向き直ると、

——存じません事とて本當に御可哀さうなことを致しました。が、解つて宜う御座いました。若し妾がこの事實を知らずに居りましたら、今日だつて辨償して上げることが出来なかつたでせう。……さ、此處に貴女の御亭主が馬鹿々々しい事で破産して終つたお金と同じだけのものが御座いま

す。この御金は當然貴女のものですから、何卒、御随意に御使ひなさい。……娘さん、貴女にはこの腕輪と首輪を上げます。御婚禮の日に飾つて下さい。——

母親と娘とは恩人の脚下に突つ伏して終つた。ライスは彼女等を起してやると、優しい詞で、

——さ、貴女方、もう御歸りになつて宜う御座います。何卒、また元のやうに幸福に御暮しなさい。さうして、是からは、決して何人も呪つてはなりませんよ。——

x

x

x

x

——ライスの言行に就いて、も一つ御話申しませう。——

とアリスチツボスが話し続ける。

## 話のII

ニケタスは富裕な貴族の子息であつた。所が彼は、人もあらうに遊女ゴルゴに現を抜かし、母の涙も父の小言も更に效無く、この「阿呆らしい」戀は、家族全體の憂慮の種で、熱中した若者は、女の歡心を買ふためには途方もなく注ぎ込む。斯くて富裕な彼も遂う恐ろしい貧困に陥る他は

無かつたのである。

ニケタスの母親は、思ひ餘つてヘテイライ・ライスの許に相談に來た。ライスは是を慰め、其息子を屹度母の手に戻るやうにしやうと約束した。

でライスは、若い貴族の扮装をしてゴルゴの所に行くと、何處と言つて取り柄の無い這の遊女が眩しいばかりの贅澤な生活をしてゐるのをちろ／＼見廻したが、さり氣無い甘い調子で、

——ゴルゴ、僕はお前に焦れ抜いてゐるのだ。涼しいお前の其瞳で、ちらと流眄に見られるだけでも、最う僕はすつかりお前の捕虜だ、奴隷だ。……若しお前が僕の願ひを諾いて呉れるなら、僕の財産もお前に遣らうし、お前と結婚しても差支へ無い。お前の愛と取り換へるなら、そんなもの位何でも無いのだ。……僕は全く氣儘な身分だから。お前の美しい其口から、たつた一言、僕を愛すると言つて呉れ。其一と言で僕は幸福に成れるのだ。……頼む、ゴルゴ、僕はお前の足許に富の全部を捧げ度いのだよ。——

浮いたゴルゴは、這の秀麗な姿をした若人を見て、内心ぞく／＼する程惹き付けられてゐた所へ持つて來て、更に其全財産を捧げやうと男から持ち掛けられた旨い話に、且は歡び且は餘りの果報に驚いた、何やら咄々言つてゐたが、遂う／＼、匿しても置かれなからして、現在ニケタスとい

ふ情夫の有ること、……而かもその激しい妬心には、ほと／＼困り切つてゐることを白狀した。

ライスは言つた。

——うん、彼のニケタスか。……彼奴は馬鹿で、最う破産してしまつたよ。いまに反つてお前から買いで貰はうとするだらうよ。……若しお前が僕の言ふことを諾くなら、僕は旨く彼の男をお前に寄り附かないやうにして遣らう。——

といふ話なので、勿論ゴルゴは二つ返事で同意した。金の無くなつた色男を捨てて、其文無しに決して戸を開かないといふ事は、願つたり適つたりのことであつた。

其晩になると、案の定ニケタスは閉め出しを食つた。叩きもし、喚びもし、叫びも爲たが、ふつとりとも應答が無い。這麼薄情な仕打をされてはニケタスと雖も憤慨せざるを得ない。一層激しく喚び且叩いた。あはや戸口も壊さうとする怒り方、……所が、豫てライスを示し合はせてゐる一人、此若者の友人が、ニケタスの散々に焦れ切つて居る頃合ひを計つて、丁度其邊を通り掛つて見付けたやうに、

——よう!! 是は! 其處に居るのはニケタスぢやないか。デイオニソス様の御引き合せ、……旨い處で會つたものだ! ——

と詞を掛ける。

ニケタスは振り向いて答へやうともせず、夢中でまだ戸を叫いてゐる。

(友)

——仕方の無い奴だなあ。……天晴れ色男のつもりだらうが、君もゴルゴにや御多分に洩れない十把一繋げのお仲間だぜ。……例外無しのお扱ひだ。——

(ニケタス) 興奮して

——何だと! ——

(友)

——ゴルゴの畜生! さては僕を騙したやうに、今又君を騙して居るのだな。……いや、うつかり強突張りの彼奴に引つかゝる方が間抜けなんで、彼奴と来た日には、騙せるだけ騙し、絞れるだけ絞り取つて、「はい左様なら」を食はせる奴さ。……それが彼奴の手段だ。——

——アフロチテーに誓つて!……出鱈目吐かせ! ——

とニケタスは眞蒼な顔をして叫び出す。

(友)

——出鱈目?……ほゝう。是が嘘なら、アフロチテーの神罰立所! 恐れべ、恐れべといふ奴だ——

(ニケタス)

——何とか彼とか言つて、人の邪魔するなよ。……僕はゴルゴだけは確かだと信じて居る。——

——今朝も今朝……や、言ふまいか。御要心遊ばせ、ちやあともう後釜が出来てますぜ。……なんなら證據を御見に見せようかい。——

——ヘフェーストスに誓つて。……そ、其處ことが有るものか! ——

ニケタスは唸つた。さうして、興奮し切つて盛に戸を叩く、蹴る、遂う／＼扉を叩き壊して終つた所に、相悪夜番が廻つて来て、這の狼藉物を捉へやうと矢庭にニケタスを取巻いた。

(友)

——何でもないんだよ君、何でもないんだ。……少し興奮、いやなに酔つてるんだ。……僕に任せ給へ。……なあ、悪いやうには爲ないから。……

友達は、やつと夜番を宥め歸すと、

——それ見たことか。……まあ氣を靜めて好く聞き給へ。……先刻から云つてるのに、何といふ君は齒痒い男だ。……詰らん女のために富を失ひ、家庭の感情迄も犠牲にするとは!! 實に、情

無い男だなあ……それもよ、バクキス見たいな人にでも惚れたんならまだしも解るが、あんな！  
ゴルゴのやうなものに……僕は、氣の毒で仕方が無いんだ。

諄いやうだが、ゴルゴが不實な女だといふ事が解つても、それでも君は惚れてゐるのか？……實際それは狂氣の沙汰だぜ。……酷い事を言ふと思つても、許して呉れ給へ。事實は事實なのだから……何を酔興に僕が……僕は君、誠意を以て事實を君に教へてやつて居るのだよ。

ニケタスも、今は黙つて、思ひも寄らない這の幻滅を感じる話を聞いてゐる。それから、遽かに苦しい悪夢から醒めたやうに、口の中でもぐぐぐ咳く。

——ゴルゴが僕を欺いた？……彼の女のために僕は、……什麼犠牲も厭はなかつたに、……否、否……夫は、有り得ない事だ……

(友)

——僕は君に、彼女の不實な證據を見せると言つたが、……若し其證據が見たいんなら、言つた事は言つた事だ。僕は立派に事實を示さうよ。——

(ニケタス)

——宜うし!! 承知した。……若し嘘だつたらコキトスの泥溝に叩つ込むぞ!——

翌日ニケタスは、友人達と一つ所にそつと女の家忍び込んで、小部屋の中に匿れて居た。すると付うだ。眼前彼女が一人の若い男を引入れていちやつき合つたり、喃々と甘つたるい口説を繰り返したりして居るではないか!

ニケタスは幾度部屋を飛び出して、不實な女を嗷鳴り付け、足蹴にしてやらうとしたか解らない……併し彼の友人は、今二人の仲間と共に、彼を掴まへて離さうともしなければ、聲も立てさせない。

で、斯くも長い間愚弄ばれてゐた賤しむべき遊女の、動かすべからざる不實の證據を見せられては、追のニケタスも今はすつかり目が醒めた。一途に煥つとした嫉妬が急に収まると彼は友人の手を取つて、

——最う漸山だ! 僕は癒つた。……這の地獄から出やう。……

其夜若い貴族は二三の親戚や友人に伴はれ、父の家に行つてだらし無かつた仕打を詫び、以後は屹度兩親の仰せを聽いて行狀を直すことを誓つた。

x x x x x

(アリスチツボス)

——ライスの斯うした行ひは讃辭に値するものではありませんまいか。……若し是が賞すべき事だとすれば、這のヘテイラの全生涯を通じて断えず是に類した言行が繰返され、常に彼女の心の美しさを示してゐたのであります。——

第二節 名言——機智——皮肉

這の有名なコリントスの女性の機智は行住座臥鋒鋦を露して、傾聽するに足る名言や、刺すやうな皮肉が殆んど數へ切れないのであるが、今、彼女の偲草に其幾つかを拾つて見やう。

× × × × ×

一人の若い雅典人が、懸命に熱烈な戀を訴へたけれども、如何にしても彼女を動かすことが出来ないで、嘆息と共に斯う言つた。

——噫、貴女は酷い方です。失望の結果僕は貴女の脚もとで自殺する他はありません。……さうなつてから貴女は、僕の戀が什麼に熱烈だつたかといふことが御わかりになります。——  
彼女は答へた。

——戀を得やうとなさるのに、其麼方法では駄目でございますわ、貴方。……なぜつて、總て女と申しますものは、戀しい方の熱情が断えず繰返される事を希い、始終相手の誠意を掴んで居たいものなので御座います。……それなのに、貴方のお話ですと、それが唯つた一遍こつきりですも

の。――

X X X X X

また、

一人の若い男が、彼女の愛を獲やうと一途に希ひ求めたが、彼女は根氣よく之を拒絶するので、耐らなくなつて彼が言つた。

――アフロヂテーの女神さま！ 吾が苦惱に慫みを垂れ給へ。……おゝ、ライス貴女を見て私の胸は燃え立ちました。何卒燃え盛る這の火を消して下さい。――

彼女が言つた。

――左うね。……貴方のやうに焦れて苦しむ方をお氣の毒と思つて胸の火を消して上げる一番好い道はね、お馬鹿ぢやん。……一と思ひにきつぱり拒絶りしてブルブルツとさせて上げることでわ。……貴方の妾に要めてゐらつしやる「火を消せ」といふ其消し様は、消すどころの騒ぎですか！ 反つて、貴方を焼き盡さうと盛に燃えてゐる薪の上に油を灑ぐやうなものですよ。――

X X X X X

彫刻家ミロンは、好い齡の爺さんだつたが、或日デメテールの神祭にライスを垣間見て、齡甲斐も無く焦れ出し、コリントスに歸るや否や彼女の館に推參に及んだ。ところがライスはミロンが未だ一と言も云はない内、いきなり

――左様なら――

と彼を送り還した。ミロンは、自分の頭が胡麻鹽なので這目に會つたんだと思つたから、今度髪黒々と染めて出直した。ライスは老人の這の狂態に辛棒が出来なくなつて、次のやうな意地悪を云つて又もや「左様なら」を喰はした。

――貴方も馬鹿ね。……頃日貴方のお父さんに厭だと言つたことを復た妾に頼むんですもの。――

X X X X X

ライスは男性の弱點をよく知つてゐた。ストア派の哲學者の噂が出ると、――あの人達は、他の方々よりも一番足繁く通つて参りますよ。――

X X X X X

野心家で貪慾なデモスーネスの話になると、

——一言に仁慈と申しましたが、それは形を變へた野心に過ぎないことがよくありますわ。——  
と言つて彼女は斯う附け加へた。

——守銭奴はお金を持つことを幸福のやうに想つて居ますが、それは、能く考へて見ますと、お金に興味を持つのでは無く、お金を獲、お金を蓄積める方法を面白がるに過ぎませんわ。——

X X X X X

或人が一日、民衆の會合を仕う思ふか、彼女の意見を要めると、彼女は答へた。

——妾は群衆の會合は嫌いですわ。……なぜつて人の數が集れば集るだけ、惡徳や、馬鹿な事や虚榮や、傲慢などが巾を利かせますからね。——

X X X X X

ライスはモンテスキューよりも遙か以前に斯う言つてゐる。

——治飾は人様の考へるよりも遙かに困難なものですわ。……夫には先づ、化粧工藝に深い知識

を要します。それから、人様に對座する前に化粧室内で準備される治飾は、武士の武具を整へるのと同じことで、何時でも冷靜に細心に、果して出陣するのに充分か如何かを見究めなければなりません。名譽ある凱旋を贏得やうとするには、先づ賢明に戰場の計畫を組織立てなければならぬので御座います。——

X X X X X

アリスチツボスが、立派な着物を着た若い男を彼女のところへ連れて來た。所が、様子は立派だが物事の分らないこと酷しかったので、翌日彼女はアリスチツボスに向つて言ふには、

——昨日の御方ね、……まるで立派な鎧を着けたトロフィ(分捕り武具)のやうな方で御座いましたこと。中身と申しましたら詰らない材木が恰好を崩さない役目を果してゐるだけですわ。——

X X X X X

遊女テオドータが

——金持と申すものは、傲慢で親切が無くつて、大抵は亂暴なものですわね。——



と彼女に愚痴ると、ライスは、

——妾は然うは思ひませんわ。それは貴女のお話になる方が粗野なので、妾のところでは善い仲間の殿方ばかりで御座いますよ。——

X X X X

産を破り、體軀も疲れた或道樂者が彼女に向つて、

——女の愛などいふものは、自分のやうな何でも行つて來た男には殆んど子供の戯れ事に等しいものですよ。——

と偉さうに言ふと、彼女は早速、

——其麼つまらないものですから、貴方の富と、貴方の精力とを無くなさしめたのでせう！——

X X X X

或知つた風な哲學者が彼女の前で、

——女性といふものは丁度子供の甜める「おしやぶり粉」のやうなもので、一度使用したら最後

誰あれも捨てゝ顧みない。——

といふと彼女は、

——それですからこそ、大きな坊つちつん、貴方は女に縁が無いのです。——

X X X X

——女の溫和でないのは、勇氣の無い男性よりもつと輕蔑すべきものですわ。——

同性の友人等が、よく其奴隷を逆待するので彼女は斯う注意を與へました。

X X X X

同性の女の一人で、同棲して居た若い貴族に惚れ切つて居るのがあつた。其女が、惚れた男が專斷で、威張り散らすのに困り抜いて、是に打克たうとするには什麼方法が宜からうかとライスは相談を持ち掛けた。

ライスは訊いた。

——貴女は其方を愛してゐらつしやる？。——

——ええ。とても！——

——ではね。……貴女の愛を其方のより尠うし下火になさいよ。然うすれば貴女は、きつと其方の心を支配が出来ますわ。……何故つて、惚れ合つた二人の間では、惚れ方の尠い方が一方の主人公となるに極つてますもの。——

X X X X X

或人が彼女に、女は鏡を見るべきものか如何かと訊いたら、彼女は言つた。

——それはもう、若い娘は見るべきで、若い年になつたら要りませんよ。……鏡と申すものは、日毎々顔の荒れを直し、お化粧するには無くてはならない道具なのですからね。さうして妾の思ひますには、若い女性で全くお化粧に氣の無いつて方は尠いでせう。……打開けて申せば妾にも鏡は無くてならない道具ですわ。——

## 第十五章

ライスの悲戀——悲嘆と死

大方の敬慕を受けながらライスは幸福な半生をコリントスに送つた。マトローナさへもおのづから敬意を表する程其言行が美しかつたのであるが、四十五歳といふ年輩になつて彼女は、殆んど思ひも寄らない、市から市を流して歩く大道音樂師に傾倒したのである。男はエユバテースと稱つた。さうして這の情事は臆て彼女の不幸、彼女の悲嘆の因となつて遂に失望落膽し彼女の淋しい命を終らせることゝなつたのである。終始能く感情を抑制し、曾つて頭腦の主たる事を失はなかつた彼女は、此處に来て遽かに心亂れた。靈藥を哲學に求め、其救援を理性に仰いだけれども、總ては無効に終つてしまつた。彼女の情熱は一日々々と昂まり、友を捨て、名を捨て、生命の全部を這の得體も知れないエユバテースに傾け盡すのであつた。

ライスの終りを明かにするため、今先づビザンチオムのアリストフアーネスを引用して見る。此哲人の物語つた所に據ると、ライスはエユバテースに捨てられた後、又もやテスサリアのパウサニアスといつてコリントスに來た男に焦れ、再び同じやうなロマンスを繰返したとあり、アテネーオ

スの説に聽けば、彼女は斯うした後、オルフェオスと同様テッサリアで死んだと謂ふ。

が、希臘の哲學者や歴史家の残した断片や、今も述べたアリストファーンの手記文などを綜合して考へると、このパウサニアスの戀物語は、全く想像から生れたものだと思ふことが出来るのである。事實、四十五歳にも成つた女が、自分の憧れる男に捨てられた失望の中に在つて、再び徒男に情を倚せるといふことは果して自然であらうか。裏切られ捨てられた女性が、其自負心を傷けられた憤懣の餘り、其思知らずの鼻を明さうと他の男に奔るといふ事は夫はあらう。が彼女が眞實流涕して愛して居た人に對すると同様にこの新來の人を戀し、再び其人に捨てられて惜しみ悲しむといふことは殆んど有り得べからざることである。畢竟是は、アテネーオスが女性の心理を知ることが尠い事に原因してゐるのであつて、要するに彼は、パウサニアスなる名をエユバテースの戀物語りに結びつけたものと信する方が當然であらう。

併し、兎に角ライスは、愛人の不實に基く深い悲嘆を忘れやうと、盛に旅したといふ事は知られてゐる。又彼女が、旅から旅と歩く間に、テッサリアに足を停めて、例の優雅な學院を開き、粗野だつた其處の人達が、このコリントスの女性を俟つて著しく洗練されたといふ事實も亦明白である。話は逃れたが、ライスは元々、歡樂の憧憬者であつて、決して愛のそれでは無かつた。所が一旦

エユバテースと相見るや、急轉して燃え爛れる情焰に呑み盡され、身元も知れないこの男が殆んど彼女の偶像と迄もなつて終つたのである。彼より他は見れども見えぬ、彼より他は考へ得ないといふ状態に陥つて、彼女は全くエユバテース無くしては生きて行くことが出来ない程の深みにはまり、二六時中情夫の傍に密着いたきりで、彼を見、彼と語ることが幸福だと感じて来るやうになつた。戀の陶醉は益々狂ほしく彼女を沈溺させる。……

一夜チオゲーネスは、花園の樹蔭から、又してもエユバテースが偽善的な聲でライスを戀の誓ひを囁々してゐるのを聞いた。哲學者の一瞥は、此男が決してライスを愛してゐないといふことを看破つた。エユバテースには唯彼女の富と彼女の勢力とが必要であつたのである。其處で、何の遠慮も無くのこ／＼歩ゆ寄つた犬儒は笑ひながらライスを言つた。

——君はあ……再婚しやうと思ふのかい、ライスは——

這の突然な邪魔者と、藪から棒の質問に不意を食つたライスは、

——チオゲーネス、此處は貴方の來る所ぢやありません！ 彼方にゐらつしやい！——

と命令的な詞を投げた。

——何あんだつて？……君は余輩に、花園の馥郁たる空氣を吸つちやならんと言ふのかな？……

君の友達の余輩に！——

と、チオゲーネスがさも意外だといふやうに大きな聲で言ふ。

——君はチオゲーネスを只の男と思つて居るのかい。憚りながら、チオゲーネスは悪徳を侮蔑擯斥する男ですぞ！ 其余輩を追ひ出して、現に君を瞞着しやうとしてゐる偽善者に散歩を許すといふ法が無いぢやないか。——

戀はライスを盲目にした。チオゲーネスが、ライスの友人たる自らの見地から、敢然として警告した深い友情をも忘れる程彼女の情熱は烈しかった。

で、斯う露骨に自分の愛人をこきおろす犬儒の詞に立腹して、彼女は語氣荒く、チオゲーネスの花園から退くことを要求したのである。

チオゲーネスは別段感動した風も無く、至極平静な態度で、

——ライス今日から君は餘つ程心の跳躍を抑へて中庸を保つやうにせにあ不可んど。……君は這の若造のために友人を嫌ふやうに成つたが、併し此男は間もなく君を裏切るぞ。——  
と言ふと、其儘緩つくり踵を返した。

チオゲーネスの豫言が事實となつて現れたのは夫から何程も経た無かつた。……

で、段々ライスは、エユパテースが自分を捨てはしないかといふ憂慮を抱き初め、結婚に依つて永久に結び付き度いと考へるに至つた。今は彼女は、最早自分を襲ふ愛慾と戦ふ力が無く、嘗つてはコリントスや雅典の富豪貴紳の降るやうな愛の手を片つ端しから拒絶した彼女、……女王の榮冠よりもヘテイラの自由を擇んだ這の女性哲人が、あはれ何處の馬骨とも判らない旅藝人のエユパテースに嫁し、富を分たうと自分から申し出たのである。

エユパテースは、表面だけは此申込みを承諾したやうに見せかけ、聽て自分の郷國に彼女を連れて行かうと約束した。而かも彼をしてイスシミックの作詩競技に賞を獲らして呉れたならばといふ條件付である。

彼女は承諾した。エユパテースは元より拙劣極まる詩人ではあつたが、ライスの友人の聲援があり、殊には金力に飽かして兎も角も入賞の榮を擔ふ事が出来た。……這の旅詩人には、若しも貴方が其作詩競技の勝利者になつたら結婚して上げやうと約束した一人の若い戀仲が居た。そこで、まんまとライスに取入つて、入賞した其日直ぐ、私かに彼はコリントスを脱けて、ライスを捨て、おまけに其親切な年増の情婦に次のやうな手紙を残して行つたのである。

——おさらば、ライスどの。小生事只今出發仕候。就者、確かに同伴の御約束を果し、其許の肖

像携帯にて旅立候間不惡御諒承願上候 匆々――

希臘語の「携帯」といふ文字は同時に「同伴」の語義があるのであつた。

這の、人を馬鹿にしたやうな手紙は、取分け氣負つたライスの自尊心を傷け、是程安つぽく見られたことが耐らなく口惜しく、それなり家に籠つて暫くは失望と悲憤の涙に咽んでゐた。

夫からといふもの、彼女の精神能力は、這の運命的な戀に依つて壓迫され、狂つたやうに幾月もくゞと彼女は、遁げた男のあとを捜し廻つたが遂に捜し終せず、性も根も疲労し切つて空しくコリントスに歸つて来るなり、どつと床について遂に怖しい病魔の餌食となつてしまつた。

アリスチツボスは其時キラデースを放してゐたが、這の悲しい知らせに接し、舊友を見舞はうとして急ぎ歸つた。クレオンはライスからエユバテースの搜索方を依頼されて方々尋ね廻つて居たが是亦ライス發病の事を聞いて取るものも取り敢へず、何等吉報を齎すこと無しに彼女のところに馳けつけた。這の、世にも珍しい友人二人の彼女に對する看護は實に到れり盡せりであつて、その賢明な話や忠告は幾分かライスの苦痛を和けることが出来たが、其健康は早最再び起つ事の出来ない迄に損はれてゐた。

彼女の心を絶えず傷めた絶望の戀は、極端に彼女を憂鬱にし、彼女は口を利くさへ大義であつた

而かも傷心しい感動から來た苦痛は無残にも彼女の美しさを奪ひ、皺は純眞な彼女の額を汚し、昔日の面影は再び歸ることなく消えて行つた。

這の時からライスは全く世の中から姿を消して終つた。身の廻りを世話させるため年老いた奴隸三人を残したきりで、彼女の館を飾つた若い乙女等も、其澤山の奴隸達も悉く暇を遣り又自由を與へて去らしめた。そればかりではない。彼女は、二三の親友だけを残して、數多い友達さへも遠ざけてしまつたのである。さうして、彼女を取巻く極めて僅かな人達の間在つてじつと悲しげな物思ひにばかり耽つてゐる。總ての慰安物も捨てた。心に受けた深い痛手は、それ程激しく肉體の上にも影響して、最早墓穴が彼女の足下に掘られてゐるやうなものであつた。友人達は見るに見かねて彼女を焼き盡さうとする這の懊惱の猛火を消すため寧ろレウカスの巖頭から入水することを勧めても見たが、彼女は、其處までの旅をするさへ餘りに弱いと言ひたげな淋しい微笑を洩すばかりであつた。斯うして彼女は、泡立海の深い底よりも、美しい其花園のミルトスの蔭に靜かにくゞ死んで行くべき運命であつた。

彼女は其晩年、ベレロフォンに獻げられたクラニオンの小さい聖林の茂れるあたりにペンテリコン山から出た大理石の立派な墓を造つて置いた。その墓の片ほとり、アフロヂテー・メラニスの社か

らも近いあたりに彼女は、莫大な金を投じて又他の一社を建立し、「永久に美しいアフロチテー」に  
献げたが、遺の恒久物こそはコリントスの最も雅致あるものゝ一つとして、彼女が捨て、再び見な  
かつた有名な鏡を吊してある。

とある詩人が次のやうな彼女の詩を譯してゐる。

X X

あなあはれ、吾が姿見

あなたふと アフロチテーの

女神にこそは さゝげめ。

永久に 艶なる

汝がすがたこそ 映さめ。

移ろふ面は 吾はも見入れば

いとむすほる 吾が胸、

物の相 伴らぬ汝を

見まほしと 吾はも願はず

昔日の 美しき姿も

うつろへる 今の面おも

見まほしと 吾はも願はず

X X

ライスは愈々終焉の近づいたことを感じた。で、最後の告別に其友を集め、自分の最後の意志を  
アリスチツポスに委ねた。彼女は、未だ澤山残つてゐる其富を四分し、其一は、コリントスのヘテ  
イラで、年齢其他の關係から悲惨な境遇に落ちて行く其人達を救ふため、其二は彼女が建立した寺  
社の費用として、彼女から依頼された三人の尼僧の神を齋く看經護持の料とし、其三は生涯彼女に  
忠實であつたバクキスに與へ、其四と其花園とは、コリントスが能く彼女を保護し且敬愛して呉れ  
た感謝の意味で同市に寄附した。……

此分配が終ると彼女は、バクキスに頼んでミルトスの冠を自分の額に飾らしめ、夫から家中の女

達を花園中の廣場なるアフロチターの神像の前に集めさせた。豎琴を奏する女達や其他孰れも花の冠を戴き、薔薇の花束を手に持つてゐる。

——何方か香爐を焚いて、薫香をひと握り入れて下さい。——  
と、彼女は言ふ。

其命令が行はれると、ライスは自分の體軀を若い女性達の真中に下ろさせた。友人達は彼女の床の兩側に並び、女樂手は其前に陣取り豎琴の音に合はせて「美しき日の終り」と題する詩を唄つた。恰かも、弱々しい入日の光が臨終の床の邊に落ち、一閃、頭部から脚の先迄キラ／＼と照して消えた。這の夕陽の光を受けると彼女の顔は颯つと活氣が漲つたやうに見える。殆んど閉された眼を見開いて彼女は自分を取巻く人達に睨つと瞳を注ぐのであつた。

彼女は言ふ。

——皆さん、……再び明日の太陽を見られる皆様、……這の軟い光は美しい日の終り、……妾に取つては、生涯の……美しい夢の終りです。

それからアリスチツポスに向きなほり、

——さよなら……さよなら、……舊い、舊いお馴染でした。……

と、彼女は涙を流しながら彼女を見てゐるクレオンを見つけて、手を與へて言ふ。

——クレオン、……貴方は誠實な心の方……どうか哀しみをお晴し下さい。……貴方は……まだ地上に暮される……幸福な日が残つてゐます。……

クレオンは彼女の手を吻けしながら、迫つて来る涕泣を抑へることか出来なかつた。

ライスの聲は段々弱くなつて来る。……死が彼女を締め付ける。……激しい努力を爲ながら彼女は、やつと次の詞を語つた。

——さよなら、……さよなら、皆さん。……時にはこの事を思ひ出して下さい。……妾は……今斯うして、墓に這入るのに、……たつた一つ惜しいことは、それは、皆さんとお別れすること、……それだけは、今度は……あゝ……今度こそは……あゝ、……永久に……永……久に！……

彼女は、も一度アリスチツポスとクレオンの手を取り度いと思つたが、最早其力が無かつた。水のやうに冷たくなつた唇の上には、死が最後の微笑をとどめた。

斯うして這の有名な美人は世を去つた。デモステーネスの記述に據ると、彼女の足もとには、諸王、王子、哲學者、美術家等、希臘全土の著名な人々から献げられた薫香の烟が立昇り、コリント人は市の飾りとして壯大な葬式を擧げ、從女の名譽を記念するため碑を作つたとある。(終)

昭和二年十二月二十日 印刷  
昭和二年十二月廿五日 發行

非賣品

譯者 大隅爲三

東京市小石川區林町五十七番地

發行者 大柴四郎

東京市芝區新門前町十番地

印刷者 池端榮藏

譯者  
檢印

(傳姬美風希)

發行所

東京市小石川區林町五十七番地  
電話小石川一六三二番  
振替東京七四三五番

國際文獻刊行會



終